



始



表圖



行  
印  
本  
館

定

*[Faint, illegible handwritten text]*

風俗系		
在 子	大正4年9月19日	主 e
	大正4年...	之 e

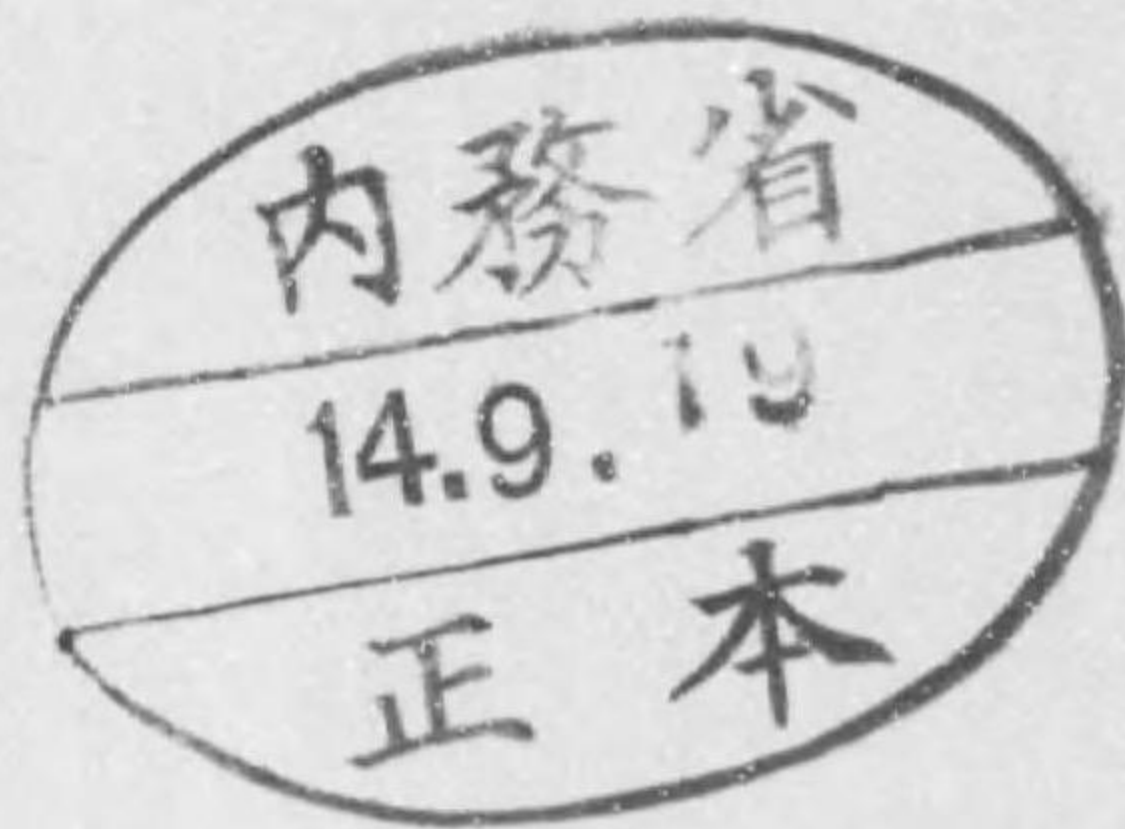
函
風 4
號
永久保存

三三三三三

作 フェシア バイツルア

性 (イキ一チ) 獣

譯 英 野 佐



版 出 社 上 至

1 9 2 5

特501  
807



80W20095

## 序

「獸性」(原名「チーキイ」——一九一七年作)はアルツイバアシエフの露西亞農民  
觀であると観ることが出来る。

彼の鋭い眼に映じた露西亞農民は必ずしも、あの淳朴な、お人よしな人間では  
なく、そしてまた、當時多くの文學者達によつて讚美された「神を懐ける民族」乃  
至は「神を求める民族」でもなかつた。彼は彼等の、そうした反面に潜む惡魔的獸  
性に對してより鋭い疑視を向けたのである。そして、それと同時に彼は、彼等農  
民生活を支配してゐる底知れない、無智、迷信を指摘した。

オルギンの「露西亞農民氣質」はアルツイバアシエフのそうした観察を裏付けるものである。彼は言ふ――

2

「彼等農民の生活は慘酷なものである。従つて彼等は慘酷に慣れてゐる。暗澹たる秋の夜、空は黒くかき曇り、風は號泣し冷かな雨が靜かに降り注ぐ時、狼と馬盜の仕事が始まる。飢に苦しむ馴悍なる狼は小舎の中の羊や牛を襲撃する。馬盜はそれ程空腹を感じてゐないけれども一層奸智邪惡である。而して意氣地の無いのに附け込んで、大仕掛の強奪を敢行するのである。全村は是等の馬盜人の爲めに始終恐怖の中にある。彼等は抵抗するものを殺戮し其の家を焼うちすることを辭せない。遂に村民が盜人の一人を捉へた場合には、無論死刑に處する。處刑の慘酷なことは臆を冷すばかりである。

公でない私の關係に於ても、慘酷と云ふことは、百姓の全生涯を通じて、いちぢるしく目に附く。父は小兒を叩いて人事不省に陥らせ、夫は妻を毆打し、時には頭髮を手に巻きつけて、床や庭を引づり廻しながら片手でなぐる。村長は、村民が規則を守らないと云つて誰でも毆ぐる。「鼻をなぐるぞ」「横腹を蹴破るぞ」「目をうんとたたくぞ」と云ふ様な言葉は、最も普通に村で云ふ言葉である。」

本篇の「獸性」の中で、長兄のキリームが白痴の三男ビョーテニカの不行跡を思

ひ切つてこらしめるあたり、妻の醜行を知つたときの彼の狂憤、裸體で傷いてゐる罪の女を間に置いて、長兄と次男との格闘――それは正に野獸の本性そのまゝである。

「哀れな荒廢した、彼等の慘酷な生活の歸結として、當然酒を飲む様になる。百姓は殆んど何等の期待なくして酒を飲む。飲酒、泥酔、續いて來る悔恨は百姓の悲惨を増し慘虐と憎惡の心を深からしめるばかりである。」

とオルギンは言つてゐる。

十九世紀終末當時に於ける、露西亞農民の生活は暴虐極まる專制政治の壓迫の下に、慘憺たるものであつた。

無辜な同胞の不幸な運命に對して、感受性の鋭敏な露西亞のインテリゲンチヤは男々しくも立つて、その救濟教化の事業に赴いた。「民衆の中へ！」とは實に當時の青年男女のモットオであつた。彼等が自己の使命に對する態度は眞劍であり

3

熱烈でもあつた。しかし、彼等のそうした純真な熱情も、一度、現實の固い障壁に打つかつたときに、現實曝露の悲哀を経験せざるを得なかつた。農民は彼等の美しい理想に對して、餘りに無智であり、無理解であつた。そこには何等の融會點さへなかつたのである。

それに就てオルギンは次の様に云つてゐる。

「當時既に經濟上の基礎は原始的自然状態から、近代的個人産業に變化してをつたとは云へ、一般農民の思考の習性、教化の程度は、なほ實質的に農奴の束縛の下にのこされ、原始人そのままの有様であつた。一八七八年にそうであつたが其後十年、二十年、三十年を經過しても依然としてその状態には變りがない。廣い世界からかけ離れてゐる露西亞農民が、他のものと何等共通點を持つてゐないと云つても、それに不思議はない筈だ。彼等にとつては紳士とは、町の衣装を著した人間で、手工でなしに生活して行く「奇妙な奴」「奇體な鳥」としか寫らなかつた。

農民に對する愛が強く、又困窮に對して、善く順應すると共に、進んで之れを享けるとしたところで、露西亞のムサークが極めて原始的な程度の文化に甘じてゐる間は、近代人は彼等と親しく言葉を

交すことは出来ない。智識階級の中で最も優秀な人々、深き愛と誠實とを有する男女でさへも、ムサークに了解されることは出来ない。」

最後にオルギンは言つてゐる。

「彼等がその壓迫の爲めに到底生きて行かれないかしらと思はれる程の重い負擔を課せられながらもなほ努力を繼續して行きつゝあるのは、神が之れを課するものであると云ふ「眞面目」な信仰を持つてゐるからであらう！」

しかし、彼等の、そうした忍従性こそ、アルツイバアシエフに残された疑問ではなかつたであらうか？

本編「獸性」の末尾に於て、辯護士ドウホウエツキイは、萬事に理性の發達した、あれ程の聰明さを持ちながらも、陪審官になつた老いた商人の「矛盾」した審判の底に潜む「神秘」な心理を解することは出来なかつた。彼は、彼の理性を以て解くことの出来ない、ある不愉快な陰影を心に残したまゝ村を去るのであつた。

勿論「獸性」の價値は、作者の農民觀だけに盡きるものではない。我々は本書に據つても、作者の創作を色づける他の著しい特色に接することが出来ると思ふ。

\*

\*

\*

アルツイバアシエフは革命前、ロシヤに於ける代表的現代都市作家として獨特の地位を保つてゐたのである。彼は驚くべき物語りの天才を有し、特に悲劇に對する鋭き洞察眼は、彼の作の殆んど全部に渡つて、不思議なる魅力を與へるものとなつて現れてゐる。彼は病氣や、肉體の凋落の必然の結果現はれる、死の恐怖から脱する爲め、彼は人間自身の中に保有されたる、熾烈にして、かつ審美なるセックスの中に、生活現象の本質を見出さんとした。

アルツイバアシエフは性の發作を、最も赤裸な態度で表現した最初の作家として有名であると云はれてゐる。その性的描寫は餘りに微細に涉り、藝術的眞理性の見地からは寧ろ、不必要であり、同時に、それは女性に對して尊敬を缺いてゐる、との非難さへある。實に粗野な形に於て現はれた、彼の性的生活の描寫にこそ、彼が創作を色づける特色があるのである。

しかし、そうした粗野な性的描寫だけが彼の作家としての内容の全部をなすものではない。彼は同時に亦他の諸感情の動きに對して、熱心に觀察する綿密なる人生の觀照家である。

批評家リポフ・ロカチエフスキイの言葉を藉りて言ふなれば、「アルツイバアシエフは自然に對して鋭き凝視を向ける。彼の自然描寫は、書齋に於てペンを用ひるのではなく、浩天の下に畫筆を用ひて書き出された、それである。それは、もはや人間の感情のプリズムを透して見たる自然の姿ではなく、それは、既に自然そのものに融合せんとあへぎつゝある藝術である……。然しながら、彼が一度、自然描寫から人間への描寫に轉するとき、彼は、殆んど、技巧的な困難と、悲哀と、失望との、どうすることも出来ない感情に打勝ことが出来なかつた。そこに



彼が人生の畫を、ナイフでかき破る惱しさがあり、死を畫き出すことになる——  
陰鬱で重い調子、ほの暗い光り、黒色の文箱、黒色の墓、黒色の洞穴、黒色の惡  
夢、黒色の砂漠、黒色の人間、——そうした總ては、太陽や、月や、星の光を追  
ふてゐる。黒色はやがて金色の色彩にかはり、やさしく、太陽の光線の中に、打  
ちまじる。人間最大の觀樂はやがて肉體への崇拜となる。」

更に、アルツイバアシエフの個人主義的的人生觀は、ニイチエや、スチルネルの  
それの如く、學研的ではないが、そのかはり、粗朴にして、荒削りな、生きた人  
生觀は、前者に比して一層の深刻味があると云はれてゐる。そして、そこには、  
西洋作家の誰のものよりも、殆んど類のない程多分に、東洋的思想を含んでゐる  
と云はれてゐる。

大正十四年八月十五日

三田四國町にて

譯

者

# 獸 性

アルツイバアシエフ作  
佐野英譯

商人ヂーキイの邸宅は、廣大な空地の廣場の中に建てられてあつた。廣場には、毎年そこで馬市が立つので、その附近の地面一體は、枯草の塵と腐れかけた馬糞とで蔽はれてゐた。人々はこの廣場を『セノイー』の廣場と呼んでゐた。

廣場には、錆び果てた下水で、年中乾いたことのない壕と、半潰れの堤があつた。遠く傳説の源を探つてみると、その堤は昔のカザツクの要塞の残墟で、壕を開鑿する際など人間の骸骨が多数現はれたと云ふことである。實に野良犬が堤の上を彼方此方に驅づり廻り、絶えずそれが人間の骨かと思はれる、なにか黄

色を帯びた、骨の様なものを運びながら、仲間同志でいがみ合つたりしてゐた。

4

廣場の周圍には、押し潰したやうなちつぽけな家が不性に建ち並んでゐた。そしてその家のどれもにが、灰色の木の垣根と、埃まみれの貧弱な庭——そこには只小さい酢っぱい果實しか實らない林檎の木が生えてゐるだけだつた——とがあつた。廣場の一方は曲りくねつた薄汚ない小川に臨んで傾斜し、その流れに沿つて、すげの木の茂みが續いてゐた。橋の袂に近く、古ぼけて黒ずんだ鍛冶屋がある、屋根は青草の伸びるに任せてあつた。夕方になると、水蒸氣と石炭の煤煙が、川から立ち昇つた。開けつばなしにされた鍛冶屋の戸口からは、妙に光を見せる赤い火が漏れ、そして合槌の調子よい音が遠くまで響いた。廣場の他の一方は、町の公園との境をなしてゐた。それは平坦なほこりつばい町の一角を飾る唯一の青い木蔭であつた。そしてそこでは祭日ごとに軍樂隊の催しがあつた。

畑地に通する長い、真直ぐのクラブセンスク街道（邦語に譯せば墓地街道と云

ふ意）は、ヂーキイ家の真正面から初つてゐた。その通りをしばく、死人が運ばれた。そんなときは、墓場に設けた鐘がその震えるやうな哀調を遠方にまで漂はすのであつた。

高い垣と、がつしりした土藏とで取り圍まれた、大きく、殺風景なヂーキイ家は、この寂寥とした廣場にはいかにも相應しいものに見受けられた。土藏の軒下には、丸太の木がそこら中に取り散らされてゐて、威勢よく生え伸びた雑草がその上にのしかぶさつてゐた。母屋は廣場に面した赤い煉瓦の一階建てで、築石は高く、そしてこれ迄一度も開け放されたことのない窓が取付けられてあつた。庭から母屋にかけて、格好のよくない硝子張りのペランダが設けられて居り、そこは冬になれば寒く、夏はペーチカの中のやうに蒸し暑かつた。ペランダの向側には一本の大きな塵まみれの柳の木があるだけで、他には目星しい何にもものもない貧弱で無益な庭があつた。

5

この邸を見た誰もが、一目見て、直ちに、其處には澁面の氣むづかし屋が住つて居ること、そして彼等は假令一錢の金でも執拗に握り込み、脂つばい食物を喰ひ、麩をかいて眠り、曾て笑つたことなどなく、酔つばらつたときや、ひどく怒つた場合には、全くの野蠻人その儘の、恐ろしくて、猛惡な人間であることに氣付くだらう。この家族の姓までが、『ヂーキイ』(獸性)と呼ばれてゐることは、意味のあることである。

老ヂーキイが死んだのは、よほど久しい以前のことである。彼には三人の息子が残されてあつた。——長男のキリーム・イワーノウキツチは、太つた頑直な、そして活動的に出来た男で、それは死んだ父親そっくりであつた。次男のザーハルは、丈の高い白つばい髪の手つた、腕力の勝れた男であつた。三男のビョーテニカは、生れながらの白痴で、脂肪質のでつぶり肥つた、低い額と、小さな狡るような眼をもつた男で、唾れが垂れそうな厚い唇をしてゐた。

たとへ、キリーム・イワーノウキツチがなほ父親の存命中から家事萬端を一身に引き受け、その一切を切廻して來たと云へ、家庭内に於ては老未亡人が引きつづいて采配を振るつてゐた。未亡人アンナ・ベトロウナは、嚴格な舊教信者で、常に黒布の肩掛けを外づしたことはなく、専心家庭の幸福を守つてゐた。町中の人で彼女を知つてゐるものは皆恐れと尊敬とを懷いてをり、ただに息子達からばかりでなく、働き人夫達や、その近所の人達の誰からも『おつかさん』と呼ばれてゐた。

キリーム・イワーノウキツチは曾つて妻帯したこともあつたが彼には子供はなかつた。

ザーハルの性質は概して家庭向きと云ふ方ではなかつた。獨身の彼は、到るところで大膽に町家のすばしい娘達と關係してゐた。白痴のビョーテニカは、色慾にかけては完全な動物的本能性の持主で、それは實に彼獨得の強烈なものであ

つた。彼は片づ端しから町家の娘と云はず、日傭女、野良の仕事に働いてゐる女、それからチーキイ家の所屬の製油所に雇はれてゐる女の尻までも追ひ廻した。彼は頗る醜い上に、しかも、もの一言話すでもなく、ただ唸るだけであつたが、彼の毒牙から脱れることの出来る女は、それ等の思慮に乏しい無智な女達の範圍では幾人とはなかつた。彼はそうした女達を、五十錢銀貨やビスケット、又は金の十字架で他愛もなく巧みに釣つた。美しい娘が菜園畑にでも姿を見せると、彼は何時何處から遣つて來たともなくそこに姿をヒョッコリ現はすのである。そして何かを唸りながら、彼女に近づいてゆき、女の手や懷中に、ビスケットやドロツプスなどを捻ぢ込むのである。かうして三日も過ぎるとその娘は、ものおぢた眼であたりに氣を配りながら、そして誰も居ないことを確めると、すばしこく恰も人目を憚る盗人のそののやうに、高く茂つたブリヤン草の中にしのび込む。そこには彼女をひた待つてゐるビョーテニカが居るのである。

やがて彼は充分の満足と嬉しさで一杯になつて庭を通り越へて立ち去つてしまふ。羞かしさで眞赤になつた娘は土藏の裏を通つて菜園畑の中に忍び込む、すると其處には自分の友達の女が居るのである。彼女のどす黒い日に燻けた胸には、すでに小鳩型や、或は赤いリボンのついた金の十字架が誇らしげに輝いてゐた。彼女達のことを人々は『ビョーテニカの名づけ娘』と呼んでゐた。

キリーム・イワーノウキツチは、こうしたふしだが、我慢出来なかつた。で若しそうした仕打を見付けでもすると、娘達を棒をもつて追拂ひ、その足でビョーテニカをあらゆる侮蔑をもつて、彼からそうした慾望を、永久に叩き落すために、ひどく威嚇しつけた。

或る日、娘が妊娠したといふ言ひ草をもつて、市場の商人であるその娘の母親が、チーキイ家に苦情を持ち込んで來た。キリーム・イワーノウキツチは、黙つてその老婆に十ルーブルを支拂つた。その夜、彼は姿を隠してゐた白痴を捕へ、

ビョーテニカがその場に打倒れて、殆んど冷くなる迄叩きのめした。そこに居合はせた皆の者が、彼に水を浴せかけた。がキリーム・イワーノウキツチは、階段の上の方に突つ立つて痙攣して拳を握りしめ、思切つて罵つた。

『かまうことはない………棄て、置け！』

白痴は子供の頃から長兄をひどく恐れてゐた。しかも、この出来事以來、彼は暗い、猛獸的な憎惡の心を、イワーノウキツチに向けるやうになつた。とは云へ、彼にとつては如何とも施す術のなかつたといふことは、いふ迄もないことであつた。

しかし、キリーム・イワーノウキツチが、外に出て、邸内の仕事を見繕いでもしてゐる場合、白痴は、ブリヤン草の中の何處かに姿を潜めて、丁度それは猛獸使に注ぐ猛獸のやうな眸差で、幾時間ともなく熱心に、執拗く、長兄の姿を眼をもつてつけ纏ふのであつた。

しかし、こうした彼も異つた一面をもつてゐた。ビョーテニカは次兄のザーハルに對しては、單に彼を愛してゐるばかりでなく、寧ろ崇拜さへしてゐた。ザーハルは、決して彼を虐めるようなことはしなかつた、ばかりでなく、時々彼に、小遣錢や、菓子を與へ、その上、時には獵にも一緒に連れて出ることもあつた。で白痴は、鐵砲の筒先から射ち出された爆音に對して、またとない興味を抱いてゐた。そして、射落された鳥が翔ひ上る力を失つて、草叢の中にでも這入り込んだ時など、白痴は、餌物に對した野獸のそのやうに眼を光らし、野獸の如き素迅さをもつて、獲物を引つ捕へ、黄色な齒をむき出して、獲物の頸のあたりを噛み破るのである。その時の彼は、牡猫のやうに唸り、そしてその凄い形相は見るからに慄つとさせた。

キリーム・イワーノウキツチは、商賣と會計の一切を管理し、ザーハルは、時々暫時だけを、曠野に建てられてある農舎（別宅）に寢泊りして、農場と、彼の

計畫になつた製油場を監督してゐた。家政はアンナ・ペテロフナが一人で切り盛りしてゐた。

白痴のピョーテニカは、附近の娘達に悪戯したり、大飯を喰つたりする外何一つ働く譯でもなかつた。

母と長兄は彼をとらへて、それは、父親のディーキイが、傲慢で、常に凡ゆる場處で、自分自身を第一人者の人間と信じてゐた罪で、神様が自分達の家庭にその代償として授けた天罰であると云ふことを、眞面目に確く信じてゐた。

二

キリーム・イワーノウキツチは、ザーハルとピョーテニカよりずつと、遙かな年長者であつた。彼は、始めて四十五歳の時になつて妻帯した。それ迄といふものは、彼は常に、そうした馬鹿氣たことは考へてみたことさへもないと言つてゐた、がしかし、或時彼は僅かの用向きで、隣り町に出掛けたことがあつた。其處で彼は、ある破産者の娘で、彼の未來の妻、グラヒラを見染めてからは、急に、暗い重苦しい氣持に襲はれるやうになり、遂に彼女を戀するやうになつてしまつた。それ以後と云ふもの彼は哀愁に襲はれ、色が黒くなるまでに熱く惚れ込んで

しまつた。

グラヒラは、何方かと云へば、脊は餘り高くはないが、しかし、全體からは調和のとれた女だつた。肉付きのいい肩、細いしつかりした手、廣くて濃いはつきりした眉、華奢で清淨な唇、白い整調して、濕つた齒が、彼女の微笑する際、そこに覗き見へ、接する人の心を浮き立たせるのであつた。そして、それは恰も、眞夏の炎天の下に曝されてゐたものが、冷い清水に接したときの様に、人の心に接吻の慾望を覚えさすのに十分の魅力あるものであつた。一言にして云へば彼女は聰明な風貌を持つた、なか／＼の美人であつたのである。

キリーム・イワーノウキツチが、妻に向けて抱いてゐた愛慾は、それは抑制することの出来ない、動物的劣情を示す全くの肉慾的衝動から來るものであつた。

グラヒラは、女として何等の非の打ちどころもなかつた。それに對して、キリーム・イワーノウキツチときては、鐵のやうに強力な健康體の所有者であり、精

力家であるに拘はらず、この結婚をする最終の時までといふもの、彼は童貞を續けて來たのであつた。

ヂーキイ家が檀家になつてゐる、中央教會の祭司長が、この縁組のことに就いて説明したところによると、『極端な禁慾生活の忍耐が今ここに、凡て終りを告げたに外ならない。』ものであつた。

無論、大低の場合、ポケットを脹ました、ばん廣の薄汚い脊廣服を着けて、何時も歩き廻る不格好なキリーム・イワーノウキツチが、一齊に彼女に目をつけてゐた若い官吏や士官連に伍し、活潑で、そしてあでやかなグラヒラに、何んで好かれる筈はなかつた。しかし求婚者としての彼には、他に、もつと有利な關係があつた。従つて彼の申出は、寧ろ喜んで容れられた。謂迄もなくグラヒラ自身は、反對に、強情を張つて首肯しなかつたが、それでも父親が承知せず、折檻を加へて迄も無理強いした。で彼女も一時の苦しい破目から脱れる爲めに遂に不性無性



父親の意に降服してしまつたのである。

婚禮の式は、新婦の両親の住まつてゐる町で擧げられた。式場にゲーキイの母親がわざ／＼立ち會つたのは、専ら、黒い房のついた重い褐色の天鵝絨の衣装を着飾りたいためからであつた。ザーハルはこの折、狩獵に出て引こんだ風邪のため寝込んでゐた。ビョーテニカは、お他人様の前で恥さらしになると云ふので、出席させられなかつた。けれ共、本人の白痴はたまらなく結婚式の場所に出て見たかつたのであつた、といふのは、ただ儀式の際にきまつて放射される大砲の音響に、どう云ふ譯ともなく非常な興味を抱いてゐたからであつた。彼が家に残されることを知つたとき、彼は喚いて床の上のたうち廻つた。これ以後といふものの白痴は一層、長兄を怨み、自分を侮辱した唯一の責任者であるとした。

結婚式には、音楽や、ロシア式シャンパン、大きな香（譯者註、ロシアの田舎の習慣として大きな香は、盛大な結婚式を語るもので、入費の程度で、香の大小

が區別された）が焼かれて、申し分のない盛大なものであつた。グラヒラは縞子の白衣装に、長い打掛けを被り、キリーム・イワノウキツチは黒い新調の燕尾服に、純白のネクタイをつけてゐた。

老いた馬喰の家は、その日は明る輝き渡つた。音楽は絶間なく響き流れ、數多の窓には舞踊の無我境にある群がちら／＼した。窓外の通りは見物人で一杯に満ち溢れ、見物人達がガヤ／＼と聲高く、花嫁や花婿や、客のことを批評し合つた。

グラヒラは踊つて、踊つて、どうやら不自然であるときえ思へる程活潑に踊りぬいた。そして聲高く笑いこけたり、氣取つたりした。しかしその間にも折にふれ恐怖をもつて、自分の夫となるべき男に目を走らせた。この色黒の、年のいつた男が自分の夫であるとは、どうしても信じられなかつた。そして、そのことは努めて考へまいとした。しかし時は流れ過ぎて、若い同志が寢室に誘はれねばならない時刻が容捨なく押迫つて来る、時が迫れば迫る程、彼女の心の中の恐怖と

本質的な寂しさとは、益々強さを加へてついつつた。そうしたことから、彼女の手は氷のやうに冷たくなり、膝は力抜けするのを覺へるのであつた。

結婚の當夜——それは羞恥、嫌厭、苦痛以外の何者でもなく、そして或る醜惡に充ちた自己犠牲の印象をグラヒラは心の裡に深く刻銘した。しかし兎も角もその翌日になつて、土地の習慣から、新郎新婦が馬車に乗つて町中を廻り歩いたときに、微笑したり、お辭儀をしたりしてゐるグラヒラの様子は、如何にも落ちつき拂つて、幸福さうにさえ見えた。がしかし、そこには既に、以前の彼女の求められた處女の快活さではなくて、金満家の夫人、乃至は二流どころの商人の女房としての輕快さと、威嚴とであつた。

三日間に亘つて續いた酒宴が濟むと、新夫婦は夫の實家に引揚げることになつた。馬喰の老人は今日が今日までも娘を、達者な馬以上には考へてはゐなかつた。が、いよいよお別れといふ時になると流石に、眼を雲らせた。グラヒラの母

親——小柄で、永久に何時も狼狽してゐる——は恰も自分の娘を、墓にでも送るかのやうであつた。

恐らく、老婆の嘆きには無理からぬところがあつたに違いない。と云ふのは、粗暴で、氣むづかしいキリーム・イワーノウキツチの顔、それから、まるで無表情な、聖像畫にでもありそうな姑の面貌を見るにつけても、娘の未來は淋しい、屹度喜びのないものであると云ふことを察知するに充分なものであつたからである。

グラヒラは、夫と姑に伴はれて、ディーキイ家のある町に向つて、クラビシエンスク街道を馬車で驅けてゐた。折も折、偶々どこかの葬式で、啞び泣くやうな弔の鐘が響き聞へてゐた。併し土地の迷信として、葬式に逢遇することは吉縁の前兆にされてゐたので、このことはグラヒラの氣持に大した影響は與へなかつたが先づ第一彼女をして不愉快を覺えさせたのは、殺風景な「セノイ」の空地と、

邊鄙な田舎町の有様を見たときであり。視野の達する限り青い何一つ見當るものもなく、塵埃でたまらなく汚ない市場に込み込んでゐる、鹽魚、タール、皮類、油、石油等の臭氣で息の詰りそうな、その田舎町を見たときである。しかし彼女がピョートルニカの異様な姿に目を觸れ、彼の唸るのを聞いたとき、グラヒラは胸が冷たくなつたかと思はれる程吃驚した。

初對面に出たザーハルは、恐らく嫂が彼等の家庭の外観から、如何なる印象を受けたであらうかと想像したに違ひなかつた。なせと云ふに彼は彼女に對して特別の愛嬌を振りかけてみせ、初對面の後、彼は元氣な口調で次のやうなことを言つた。「ネー嫂さん、心配する程でもありませんよ、この家にだつて、そう不愉快な事ばかりがある譯でもないんですから」

## 三二

しかし眞實に言へば、この家には楽しみと云ふものは全然なかつた。

『私共の生活が、世間の人達のに比べて、殊更に悪いと云ふ譯はない。』と云つたアンナ・ペテロフナの自慢はあながち事實と大して懸け離れたものではなかつた。蓋しこの町全體の住民の生活は、チーキイ家の生活と別に擇ぶところがなかつたからである。

町と云つても、それは名ばかりの全くの田舎町で、縣廳の所在地の都會に百五十露里、一ばん近い停車場に三十露里も距つてゐた。町には官吏や、商人、それ

から一般下級の町人達が居住し、又騎兵聯隊も駐頓してゐた。郡立學校を初め、中學校、女學校や、更に官衙、集會場、ボルチエスク、カムスキイ銀行の支店、ウキノグラード氏の經營より蒸氣製粉所、監獄、それにいくつかの教會堂があり、中央教會堂には、靈驗あらたかな聖母の像が納められてあつた。

町の中央の市場には、賣店——いづれも細長い低い建物で、屋根は青く塗つた鐵葺——が軒を並べて連つて居り、建物の内部は夥しい數に仕切られ、底暗いまるで穴藏のやうな小店が出来て、そこでは更紗、皮類、石油、馬具、釘、鎌、火藥、散彈、卸、その他いろいろの小間物を販賣してゐた。市場の中央に當つて高く拔ん出てゐて、木柱に大きな屋根を覆せた古い建物があつた。この建物には『シヨポイ「お尻？」』といふ特に變つた名稱が付けられてあつた。多少でも行儀を知る町家の娘達が口にすることを躊躇するやうな名稱のものであつた。この建物の軒下には、雜貨屋に便利な木造の倉庫が建てられてゐた。

町には俱樂部が作られてあり、そこには餘り悪くない圖書館が設けてあつた。

娘達や中學生又は役人達の遊び場所になつてゐる運動場があり、そして圓い廣間や夏季食堂の備へられた公園があつた。俱樂部内では、夜、舞踊會や、素人演劇會等が常に催されたが、それは只若い青年達の喜びの機會になつただけのことだ。老人達は寧ろ、カルタや酒食の方を擇んだ。そこで圖書館の書物を利用でもするのは、若い女達か、若くは若い猶太人だけに限つてゐた。

この町を天地に、結婚もあれば、出産もあり、死もあつた。商人は商賣に、役人は役に働き、一般の下級町人は、それぞれ様々の小仕事に職を求めてゐた。少くとも一瞥したところそれらの人達には、それぞれ獨立した固有の生活——他人とはまるで關係のない——があるように思はれる。が併し眞實のところは、こうした彼等の凡ては、町の周圍に散在する廣い田園、勾配地、林、だだつ廣い沼地を控へてゐる大小幾多の村々、それらを相手に生活を營むでゐるもので、決して

彼等自身獨立的な生活の關係にあるのではない。

さて、これらの大小多くの村落に生活してゐる住民の状態を見ると、奇體な半野蠻人性を多分に持ち合せてをり、迷信深くて、いづれも示し合せたやうに、もぢやくの髯をたくわへ、夏から冬に打通した厚い、そして汚れて黒づんだ、まるで土で慥へた様な帽子を被り歩いてゐる。これ即ち、謂ふところの百姓（ムヂーク）なので、幾多の華かな都會で、多くの人々が彼等百姓の救濟方法に就いて、書物を書いたり議論し合つたりしてゐる。彼等百姓を呼ぶのに『神を懐いた住民』といふ言葉を使ひ、彼等の中には何かしら彼等特有の、偉大な、そして神聖な真理の含まれてゐることを想像して、彼等に就いては大いに學ぶべきものがあると主張し、凡ての政治團體が、この『ムヂーク（百姓）』なる言葉の旗下に組織され、それが起因をなして、大事件は惹き起され、しかも献身的の智識階級の若者達は、敢て殺戮、苦役、絞首臺の犠牲にまでなることを何れも覺悟した。

然るに都會に於てはこうした議論に捉はれてゐる一方に彼等百姓は、灼熱の陽にやかれ、酷寒の中に凍えながらもなほ、信じ難い敏捷さで、壊れかけた鋏を振り廻し、冷汗を絞りながら力の根限り僅かに残された砂や、石のやうに硬い赤土の地面を敲き、林を切り開き、沼を埋める仕事を繼續しつゝある。しかも、その上にも尙負擔し切れない過重の税金を徴收されるのである。

生活の全部を失ひ、次から次に町に向つて流れ込む彼等は、全くの野蠻人の如く、魂は枯れ、そして臆病な人間に變り、正帽やつばの廣い帽子を被つた凡ての人達に對しては、極端にまで屈從的になり、馬鹿町噂に頭を下げ、帽子も被らず身體を野天にさらしては、せめてもの救濟を頼に官廳の門前に佇み續けるのであつた。

定期市場の開かれる當日など、馬を曳いてゐるもの、車を引張つてゐるもの、妻子を連れ、犬を連れたものの夥しい集團が町に向けて入り込んだので、通りと

云ふ通りはそれらの群集で一杯に塞がり、車の軌る音、馬の嘶き、小兒等の泣き叫ぶ聲、酔つばらいの喚き散らす聲、破廉恥極まる掠奪等、それは、雑踏、混亂の極みである。空地に散在した彼等は棒を立て、穴だらけの天幕を張る。そのために町は丁度、韃靼人かチンギスカンの野蠻人の侵入當時その儘の光景を思出させるのであつた。

しかし町の住民達の多くは、彼等の必要の爲めに、又彼等に依つて存在を保つてゐるのである。市場は彼等の必要に迫られて設けられたもので、官廳は、彼等の保護取締りから設置されてゐるのである。教會も、白色の四階建の監獄も亦彼等に對してこそ必要なのである。

商人は彼等を詐り、町人は彼等を瞞し、坊主は彼の遺口で、恐しい地獄の話しに彼等の膽を潰すようなことのみを擇んだ。將校や兵卒は、土地と、自由とに關する勅令について、飢餓と無智な殺伐な噂に根を下して勃發する、無自覺にして

野卑な彼等百姓の動亂を鎮壓するのが、彼等の日常の仕事であつた。

都會の青年達は、或る時期の年齢に達すると、勉強の手を打切り、老人連の後を引き次いで新しい盜賊に、或は掠奪階級の位置に座り込むし、若い娘達は、公金費消者の許に平氣で嫁ぎ、青年は學位稱の授與されるのを待つて、各々がそれぞれに相當する正服を着けて役人になると云ふ順序である。そこにはただ、永久に繰り返される新陳代謝があるだけで、不變的進歩の法則を、忠實に遵守してゐるに過ぎないやうに思はれる。

町の全住民！ 彼等は欺瞞と、掠奪とを目的の全部として生活してゐるのである。よし理性に富み、鋭い良心の閃きを持つ生氣ある人間であつても、そこに一度這入り込んだが最後、その瞬間を最終に彼は一般にその町の人達に根強く喰ひ入つてゐる食慾と怠惰の影響にすつかり浸み染つて、その精神は忽ち鈍重に衰へてしまふ。金錢、攝食、睡眠、カルタ、無駄話し、偽善、宴會等のそうした一

切の生活、それは互に争闘と殺戮を生む都會民そのものの生活である。

28

デーキイ家の人達の生活も、亦等しくこうした都會生活のおたぶん、に洩れたものではなかつた。

彼の廣い構への大きい邸の内では、勘定や、量りでいつも誰かを誤魔化してゐた。この邸に遣つてきて内部に這入つた百姓が、暫く經つてからそれが度を失つたやうな目付で、いかにも訝しさに堪まらないと云ふ風で汗ばんだ顔に異様な表情を浮べて、邸内から飛び出して來るようなことは何時ものことで、さして珍らしいことではなかつた。

『全體何うしたのだらう。』と彼はそこで一人つぶやいた後、地上に靜かに視線を投げると、何か考へ抜こうとする彼は舌打ちして居酒屋へと這入つて行くのである。

しかしデーキイ家に於ては、家庭としては別に不自由を感ずることはなかつた。利益を手占めすることだけが努力で、その餘は食つては眠る無難な家庭として通してゐた。

キリーム・イワーノウキツチは、全身が汗ばんで、息詰るやうな思ひで終日を打通して掛引の仕事に没頭し、怒つたり、神に誓を立てるのがその日の生活で、母親のアンナは又又彼女で黙つてはゐなかつた、下女を叱る時などは金切聲をふり絞るのであつた。ザールは製油所で働いてゐた。

晩食とお茶どきだけに、皆が一處に集つて顔を合はし、そして彼等は各々に怠慢や浪費のことについて非難の言葉を交へ、そして利益や損害の同一の話題が繰り返され續けられるだけであつた。馬鹿氣切つた冗談や、粗暴極まる動作、虫のいゝ祈禱、命名日と婚姻、不愉快な葬式、氣を腐らすやうな酒宴、殆んどが氣拔けて仕舞ひそふな教會のお勤めの安息日が、せめてもの彼等にとつての無上の

29

氣晴しとなる日にされてゐた。

グラヒラはやがてこうした人々の生活の中に混つて、それら凡ての生活に馴れては來た。そして一面彼女の生活は如何にも幸福であるときへ、或は考へることが出來たのかも知れなかつた。尠くとも彼女が扮装して夫と擦れ合ふに肩を並べて教會に出掛けてゆくときや、又は菓子果物を出して客を饗應する場合など、彼女の美しい輝いた面には、安靜とも見へる落付きが浮んでゐた。

結婚して二ケ年は過ぎ去つた、彼女は著しく目立つまでに肥つて來た。そして動作は如何にも輕快さを加へ、言葉の調子は益々流暢になつて來た。その一體の變化を綜合して云ふなら、彼女は一層以前の彼女よりも優美になつて來たのだつた。がどう云ふ譯かこれまでさうであつたやうに、彼女に會つてその魅惑的な微笑に接したとき、直ちに接吻せずにはゐられない氣持を起させる或ものが今は既に失はれてゐた。

グラヒラが夫に對して懐いてゐた恐怖心は、今も尙變りはなかつた。しかし今は尠くも夫の氣むづかしい、疲れ果てた抱擁に對して彼女は、腹一杯に食ひ詰めた牛のやうに、無性に無關心に受けながすことに馴れて來た。

キリーム・イワノウキツチは、殆んど彼女に對して特殊な注意を向けると云ふことは全然なかつた。そして只自己の、飽くことのない慾望の力に驅られ、その頑丈な精力の溢れた體軀をもつて、夜毎に、彼女の肉體のうへに迫るばかりであつた。

母親のペテロフナは嫁に對して憎しみを抱き、何かにつけて當り散らした。殊にある日、馬喰の親爺がボロ／＼の姿で金の無心に來てからと云ふものは、一層嫁を虐待した。その親爺は汚なく、うすぼけてペロ／＼に酔つばらい、野卑にオドロ／＼してゐた。誰も親爺には惠まなかつた。しかも彼等は、乞食の家から來た嫁だと云ふ口實の下にさん／＼グラヒラをいぢめた。



『大事な、お父つさんの様子は大方見なかつたらうよ！ 親爺さんの家に居た頃は、ポロ／＼の着物を引擦つてゐた癖に、この家に來てからはどうだ、まるでお姫様だ！』

ザーハルはグラヒラには親切で、殊更に同情を彼女に寄せ、そしてしば／＼彼女を母親の虐待の鞭の中から、また彼女の美しい姿に目をつけて犬のやうに付纏ふ痴のビョーテニカの手から、彼女を救つた。

しかしザーハルは家に留つてゐる場合は滅多になく、大抵は農舎の方に行つてゐるか、でないなら獵か散歩に出るのが常であつた。ビョーテニカは、いつも唸つてゐるばかりだつたが、二年目の終らうとする頃から、夫のあるグラヒラを密かに戀ひ慕ふやうになつた。最初の裡は彼自身にも不明確なもので、彼の氣を焦立てるに足る程のものではなかつたが、その初期の必然的な時機を過ぎて、彼の感情は變化を現はして來た。

ここに一つの出來事が發生した、と云ふのはザーハルが搾油機の鑼旋にかかつて跳ね飛ばされたために、頭をひどく負傷したのであつた。傷は餘り大きいものではなかつた、がどう云ふ譯か膿をもち出して、それで傷口は毎日洗淨したうへに繃帯する必要があつた。グラヒラがその仕事を引受けてやることになつたのである。

ザーハルは椅子に腰を下し、若い婦人はその側に立ち添ふて、水の這入つた小皿に綿を浸し、傷口を濕しながらガーゼの糸の一本一本を注意深く専念に取り除いてゐた。

手術はかなりの痛みを覚えさすものであつた。それでもザーハルは、ちつと我慢を續け、少しも痛くないと云ふ風な表情で、笑つたり、冗談をさへ言つたりした。

『家の姉さんは、素敵な手際ですね！ きつとお醫者さんになつたらよかつた

と思ひますね』

グラヒラは満足な氣持に顔を赫らめ、更に一層うまくやらうと努めた。

かくて或る時のこと、それはいかにも偶然のことであつたが、彼女はザーハルの頭を自分の温かくて柔かい、弾力のある胸の邊に壓しつけた。接觸はほんの瞬間であつたが、グラヒラは本能的に體をはつとして引こめた。しかし何故か二人は同じように等しく心が急に搔亂されてゐた。夕闇が訪れる迄グラヒラは沈黙して、呆然としてゐた。でもザーハルは、恰も今初めて彼女を熟視するかのやうに、とき／＼若い婦人の姿に目を向けた。暫くして彼等は辛うじて我に還ることが出来た。が彼等はこの思ひがけない接觸で、初めてお互に——彼は女を、彼女は男を——その心の深奥に觸れてそれを發見したものであつたか否かは疑はしいのである。

この夕べ以來、ザーハルは不思議に、殊に、男性と云ふ意識の中から、彼女の

麗はしい肩や、張り出した胸、しなやかな髭つき、赤い唇に目を留めるようになった。グラヒラは又義弟のみなざるやうな温情を心に想ひ煩ふた。毎日の繃帯巻きの機會が、いやが上にも彼等を益々内部的に接近せしめ、そして二人は同じ一つのことを心に待ち望んでゐた。即ちザーハルはグラヒラの體が觸れるのを切に欲求するし、しかも彼女はややもすれば彼の頭を自分の胸に壓し付けようとする氣持になつてくるのを、辛うじて危く支へ得てゐた。遂に斯くして、殆んど彼等の意志を突き退けて裏切る行爲に出るやうなこともあつて、その場合に二人は想像の及ばない甘い、恍惚の境に我を忘れて浸つた。

ザーハルは、身動き一つしないで椅子に腰掛けてゐた、が、グラヒラは内部から燃え立つ焰の熱氣で上氣したやうになり、まるで夢心地で半ば目を閉ざし、傷口に綿をあててゐた。水はザーハルの髪の毛を傳つて襟下に流れた、が二人共そんなことには全く氣付かないで續けてゐた。暫くの後、丁度夢の世界から脱れ

て来たかのやうに、驚きと不安な氣持になつて二人は相方に立ち退いた。

一週間経過すると、傷口はすつかり癒つたので、繃帯の必要はなくなつた。それまで與へられてゐた機會は斷られた、で、自然彼等の關係も従前の常軌に迄復した。しかし、それは表面にそうした状態に見えるだけのことに過ぎなかつた。

ザーハルはこのこと以前から、美しいグラヒラの嬌態がひどく氣に入つてゐた。けれ共會つて、一度も女に對する注意をもつて彼女に目を向けて見やうなどとは、夢にも思つてゐなかつた。グラヒラは、彼にとつては實兄の妻としての關係であり、それに彼女について卑劣な考へを持つなんてことは、取りも直さずとんでもない罪惡のやうに心で解譯をしてゐたのだつた。あの繃帯のことからそのとき經驗した、不可思議な心胸の動搖を、彼は努めて忘れ果てようと試みた。でこの試みは効を奏したらしくみへた。彼はその後再び町家の娘達の尻を追ひ廻すようになり、田園の方の農舎に出掛けたり、従前に變りもなく自分の製油所の仕

事にいそしんだ。製油所は、家から餘り遠くないクラッドピセンスク街道の荒地の中に建られてあつた。

一方グラヒラは、明かに、彼女の生活に多少の深刻味を加へてきた。彼女はこのことのあつてから後は、ザーハルとの關係に就いて、普通以上の交際を求め出した。若し彼が、長いこと姿を見せないようなことがあると彼女はいつも非常な淋しさを感じ色々な口實を設けては、毎日のやうにでも製油所にまで驅けつけるのであつた。製油所はザーハルの一人舞臺の世界で、そこでは彼はよく農奴のやうに熱心に働いた。あるときは、木製の圓盤を廻轉さすために、馬を操り、また或時には、水壓機の把手を執つて労働者の助勢もやり、その外絶えず冗談を云つては笑つたりしてゐた。彼の襯衣は、胸の釦が外され、袖は肘のあたりまでまくし上げられてあつた。グラヒラは人目に立たない様にして疑乎と、彼の陽に焼けた、嚴丈な筋肉の凡ての部分の動きを熱した眼で見守つた。そのときの彼女の眼

は曇り、頬は上氣から赤味を帯びてくるのであつた。

『どうしたの！ 嫂さん——、お手傳にでも來たんですか？』と云つてザーハルは、からかい半分に尋ねたりした。グラヒラは顔を赫らめながら笑つて、そして出て行くのであつた。で夜になつて、夫が彼女に寄り添ふたとき、彼女は如何にもぢれつたさうに、彼を突き退け、『まあ！ 止して頂戴な……もう澤山……わたし眠たいのよ』と云つては夫をどぎまぎさせるのであつた。

或る不明瞭な氣持が、彼女の内部に働いてゐた。それが嫉妬であるとはつきり知るまでは、彼女自身にもそれが何故であるか何うしても解らなかつたのであつた。

あるとき彼女は、ザーハルが、製油所に働いてゐる娘の一人に、戯れてゐるのを見た。その娘は別嬪で、健康で、傲慢さうな娘であつた。娘はザーハルの胸の邊りをついて、ニツと齒を見せて微笑した、それは、いかにも誘惑的な表情で、

心をそそる挑發的なものでさえあつた。

『お、可愛いね。』こう云ひながらザーハルは目をしばたいた。娘もすぐと笑ひ添へた。それを見たグラヒラは、黙つて脊を返し歩み去つた。そしてその日は終日彼女は、ザーハルが冗談を云ふのにも返事さへしなかつた。

この日の事があつてから彼女は初めて、自分がザーハルを戀してゐると云ふ確かな事實を知ることが出來た。そして、それからと云ふものは彼に對して抱く心が、彼女をして凡ての女に嫉妬をもつて見るやうにしてしまつたのであつた。ザーハルが客に招かれてゆく（それは大抵娘のゐる家に決つてゐた）と、グラヒラは落ち付いてゐることなどは、到底出來ることではなかつた。そして彼も何れ結婚するものと思ひ浮べてみると、彼女は何うすることの出來ない惱ましさを覺えた。それと同時に、彼女に、自分はザーハルの知つてゐる限りの女の中で、一番美しく、優越してゐると云ふ自分の存在を、彼に見せつけてやりたい強い望

みがあつた。で彼女は彼の面前で、態と自分の長い波のやうな黒髪を解き亂したり、又は襯衣一枚で彼の目にとまらせようと努めてみたり、更にそれは愚劣であつたが、自分の全くの裸體姿を彼が見てくれればいとさへ欲した。こうした考へを思ひ返したとき、彼女の顔は頬照り、心は烈しい羞恥で失神するまでに一杯にされるのであつた。しかし彼女の肥満し切つた肉體は、困惑した暗い慾求に惱まされ、太つた足は、淡い心の刺戟にむづ／＼した。

この世で例令何を代償にしても、彼女は何人に對してもこの自分の尊い心を他に與へまいと強く決心した。何故なら、彼女にはあらゆる男達を罪に穢れた人間としてゐたからであつた。ザールのお蔭で殊に心の悩みを覚え出したとき、グラヒラは彼のことを、夫の愛によつて、意識の裡から葬らうと努めた。しかし、その心の努力によつて經驗することはただ疲労と、憂愁な苦悶と、夫キリーム・イワーノウキツチに對して抱く嫌惡の心の外には何ものも得られなかつた。

## 四

或る夜、デーキイ家から三軒程距つたところに火事が起つた。火事は商人ソロドニマフの木屑を入れた物置場から始つたのであつた。

氣味悪い暗黒な夜空は、赤い、搖亂する火の天光で明るくなり、そして近傍の鐘樓は上から下まで、バラ色に照し出された。火事場の上空高く、紫色の煙の濛々と渦巻く中に、赤い火の子は飛び散つた。町中の教會から亂打される警鐘の音響が、物凄く天地の中に震へ渡つた。デーキイ家の邸内からは、消防夫達のどよめきや、斷續して發する水管の爆音、犬の吠え立てる聲、相呼應する驚愕に満ちた

叫び聲などが手にとるやうに聞きとれた。時々燃へさかつた火柱が、耳を突ん裂くやうな音を立てて倒れると、同時に、無数の火花を振り散してそれが暗黒の空に、壯快に立ち昇つた。邸内は晝のやうに明く、そして時々燃へながら落ちて来る火の子がとんで来た。全部の労働者は、それにキリーム・イワーノウキツチ自身までも、バケツを手にして、土藏の屋根の上に押し登つて、落ちて来る數多の火の子に水をそそぎかけた。

玄關先に突立つて、身動きもしない母親の姿が見えた、全身は、闇の大氣に包まれ、ただ火事の明りで蒼白く照し出された顔と、瘦せて骨ばつた手とが浮び出てゐた。

火事の夜に、人々は往々にして苦痛な氣持と、また、反對に或る何か知ら愉快な氣持とを同時に經驗することがある。それは、近接した周圍の凡てが變化を遂げて、異常な美しさを以て轉換された新しい觀念の中に、生起してくるところの

或る事實が発生しつゝあるといふ、そのことであるやうに思はれる。

グラヒラは既に眠りに入らうとしてゐた。とそのとき、『火事だ！ 火事だ！』と叫び喚く聲が起つたのを、彼女は臙げな耳朶の近くに聞いた。

彼女は大きな肩掛けを、手早に引掛けると玄關の方に駆け出た。

その邊の夜の大氣は、息詰るやうな厭な温かさで、そして火事が近いために堪らなく熱くなつて来た。彼女は母親のすぐ後に立つて、火煙の燃えさかる音や、人々の叫び合ふ異様な聲を不安そうに聞いてゐた。幾つもの警鐘が彼方此方から鳴り響くと、火事は益々火勢を加へてゆくやうに思はれた。赤く焼けた火事の明りに照し出された屋根に、キリーム・イワーノウキツチと他の労働者達の黒い影が、手に取るようにはつきりと見られた。彼等は相方から互に示し合ひながら、落下してくる火の子を消し止めるために、絶えず蹲んだ。屋根の一方が明る輝いてゐるので、土藏の軒は反對に一層暗く見えた。そしてその暗闇の中では、犬の

鎖のガチャ／＼と鳴る音が聞へた。

グラヒラは素肌の肩を肩掛に包んで立つてゐた。火事の明りを受けて、それは曾つて見られなかつた目新らしい、特別な美しくしさを見せてゐた。

ザーハルは、黒い煙に包まれた火事場の方に、遠て、駆けつけて来たが、家族達の安否が氣遣いられるので勢づけて引返して来た、彼はそこでふとグラヒラを發見して屹驚した。

『おや、おや……』と彼は快活に叫んで、『どうです、よく燃えるぢやありませんか！ 驚いたでせう、嫂さん？』

グラヒラは彼の言葉には返事をしなかつた、そして前と同じ様に火焰を睜つてゐた。彼女の黒い眼の中には輝いた小さな火花が反映してゐた。

ザーハルは火事の形勢を見るために、玄關口に上り、グラヒラと並んで立つた。

『何でそんなに屹驚してるの？』ザーハルは繰り返して云つた。

グラヒラは黙つた儘、下から上の方に視線を運んで、眞面に彼の顔を瞞めた。この沈黙の眸差の中には、何かある意味深い働きが含まれてゐた、でザーハルはそれをみると思はず惱ましさを覺えた。

『どうして貴方は私に對して、そのように……』彼の聲は顫えてゐた。しかしグラヒラは不意に、脊を向け返すと、靜かに暗い廊下の方へ歩み去つた。

ザーハルは、玄關口に佇んでゐたが、突然、それが火事のこと、母親のことも、それからこの世の中の一切のことも忘れ果ててしまつた。思ひ設けぬもの狂はしい想念が、腦裡を衝き、旋風のやうに彼の意識全部を瞬く間に押し包んでしまつた。曾つて、彼にとつて恐ろしいことに思はれてゐたことが、今、突然手近に、そして可能な形を示して来た。この一切——夜、火事、猛火の爆音、警鐘、闇と明み、——は餘りに異常なものとしての實在であつた。こうした夜には、凡て

の企てられた意志が實行を促して、しかも何者の恐れをも持たなくなるのである。彼は、母親が厳しくそして、さとすやうに言ひかけたとき、なほそれをまだ躊躇してゐた。

『ボンヤリしてゐる場合ぢやない、お祭りぢやないんだよ！ 早くランプに灯を点けたらいいに……、グラシーヤ!! グラシーエンカ!!』

グラヒラは答へなかつた。彼女は廊下の闇の中に立つてゐた、そこからは、火事の明に照し出されてゐるザーハルの姿も見えれば、姑の呼んでゐる聲も、聞きとれてはゐたが、何故とも知れぬある淋しい感情に、すつかり思ひ耽つてゐたので、返事する程の氣持に餘裕はなかつたのであつた。彼女の内部に働いてゐる不思議な氣持、それはグラヒラの期待してゐたものであるが、彼女自身それが何であるかは知り得なかつた。それで若しこの瞬間、ザーハルが彼女を呼ぶかでもするならば、彼女は恥も怖れもなく、無我無中に、自己の凡てを投げ出して了つた

のかもしれない。それで若し、誰かがそのときの彼女の行動を制しようとするのなら、グラヒラは彼を殺してまでも結局最後の行く處迄行かすにはゐなかつたらう。

『グラシーヤ!』と姑は呼んだ、『一體あれば、あすこで何してゐるんだらう……：聲にでもなつたのかい。ザーハル、お前行つて、あれにランプに灯を点けるように話してお呉れ。』

ザーハルは向きをかへ眞直ぐに暗闇の中に這入り込んでいつた。彼の足は痺れた。彼はグラヒラがどこに居るかを知らなかつた。しかし、息詰るやうな家の闇の中に這入ると、すぐ彼は彼女が、どこかすぐその近くに、しかも自分を待つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

グラヒラは明りの差しこんだ戸口の蔭になつてゐる處に立つて、ザーハルが自分の方に向つて眞面に近づいて來るのを見てゐた。そして彼女は、その場處から



動こうとはしなかつた、で彼がなほ五歩とも歩かない中に、彼女とビツタリ打突つた。彼はそれがグラヒラであることは、よく知りぬいてゐたが、何故かそれでも低い聲で、しかも度を失つたやうに驚きの聲を立てた。

『誰！』

グラヒラはそれでもまだ黙つて、身動きもしなかつた。ザールは、ぐつと手を差延べ、そして暗い闇の中に何か温ましい滑かな、しかも柔かいものに突然觸れた。彼は急に頭がクラ／＼つとなつて來たのを覺えた。すると盲目的に彼女をぐつと抱き占めようとした。が、そのときグラヒラは不意に身を外らして、暗闇の中に身を隠した。ただ彼女の乾いた、火のやうな息の觸感が、彼の頸と頬のあたりには振りかかつただけだつた。ザールは、彼女が自分にキツスしたのか、どうか全く解らなかつたであつたらう。佇んでゐた彼は僅かの間動かなかつたが、やがて歩を變へて靜かに玄關口の方へ立ち去つていつた。彼の足は顫へ、額の邊

はすつかり濕つてゐた。

玄關先で、彼はキリーム・イワノウキツチに出會つた。彼は重々しく階段を昇り、そして腹立たしげ云つた。

『付け火に決つてゐらあ！ 仕方のない奴等だ！』

屋外はすでに大半元の暗さに返り、鐘の音響も絶え、バラ色だつた鐘樓も灰色に變り、黒くなつた土藏の蔭では、なほ大勢のガヤ／＼聲がしてゐる。火花はもうすでに飛び散つて來なかつた。土藏の屋根に上つてゐた労働者達も不用になつたので、一人降り二人降りして、呑氣らしく聲高に騒ぎながら、暗い闇の中に消へていつた。

キリーム・イワノウキツチは、ザールを見ると、多少いま／＼しそうに云つた。

『イワノイチ、大した損害なんだ！ 焼け残つた品だつて、殆んど全部が駄

目なんだ』

ザーハルは沈黙を續けた。兄の姿とその聲が、重苦しい、臆病な羞恥を潜ましてゐる彼の心に、或る壓迫をもつて迫つた。彼はふと、自分で逃げようとしてゐた行動を知ると、急に堪らなく戰慄した。この氣持は、彼が眞蒼になつた程鋭く激しいものであつた。彼は遽て、階段を下り、家から少し離れた、暗い、廣い庭の平地に突つ立つた。

『そうだつた！ そうだつた！』

彼は、頭が非常に混亂してくるのを感じた。そして、なほ指先から全身に亘つて、ある温かくて、柔かい、滑かな感覚がまだ残つてゐた。

彼は遠くからキリーム・イワーノウキツチが、グラヒラを怒鳴りつけてゐる聲を聞いて、思はず身を顛はした、そして兄に對して、或る憎惡の心を覺えた。

火事は全く終熄して、附近は恰も林の中の闇のやうに暗くなつた。ただベラン

ダの硝子に、赤色の反映が残つてゐるだけであつた。窓には薄明りが見えたので家にはランプが點されてゐたのだらう。ザーハルは、土藏の暗い蔭に立つて、家の方に眼を向けてゐた、けれども彼は、さて何うした處作に出てよいかその判断がつかかなかつた。

それは、既に危機一髪のところ、殆んど取返しをつかない恐ろしい罪を犯すところであつた、といふことを彼は今漸くはつきりと意識した。しかもこの意識とは反對に、不可抗力な肉慾的の欲求が、彼の内部を壓倒して來た。そしてそれが彼には、今となつてはどうだつていいやうに思はれた。どうせ晚かれ早かれ、必然的に打突るべき運命として……。燃えるやうな羞恥と共に、感覺的の遺瀨なさが湧き、それは盲目的な憎惡と變つて、グラヒラに向けられた。

ザーハルは、朝になるまで庭内を歩き廻つてゐたが、廣場に出てしまつた。丁度曉の弱い光りが反映して、廣場は殊更に空莫さを示してゐた。彼は、帽子も被

らず長い間堤の上に佇んで、次第に明るなるにつれて静かに姿を現はして来る町の家々を眺め入つてゐた。

彼が眠る爲めに寢床に横たはつた頃は黒い屋根の輪廓と鐘樓の蔭には、幅廣い曉の線光が擴りかけて、クラドピシチエンスク街道には、市場に急ぐ女の群が壺や籠を持つて、歩いてゐた。

その夜、グラヒラも亦眠らなかつた。彼女は躰をかいては、眠つたまゝ何度も寢返りを打つ夫の側で、大きく眼を見開いて闇の方を瞞めてゐた。大きな肥満した夫の粘つくやうな體からは不潔な肌衣の臭氣が發散した。その爲めに彼女は壓え付けられる様な思ひであつた。彼女は熱苦しいので、そつと壁際の方の冷たい空氣に寄りつき、そして勉めて夫の體に觸れまいとした。彼女はザールハルの顔が執拗く彼女の目の前に現はれ、そして彼の手が彼女の肩や、胸に觸れるのを覺えた。彼女は自分が殊更に肩掛を開いて兩腕に彼を抱かうとしたことを思ひ出すに

つけ、餘りの羞しさに堪え得ないかの如く眼を閉じた。しかし、それと同時に、彼女にはこの思ひ出を永久に残して置きたい様にも思はれた。彼女は、恥も外聞も打ち棄て、ぼんやりと蒸し暑い床の中に體を投げ出しながら、罪深い、甘味い想ひに全身は熱し、そして疲れはてた。が、突然、彼女は、かの事實について思ひ煩ふことの、如何に恐ろしい罪惡かを思ひ浮べると、全身がすくみ、思はず膝を引縮めた。

既に、ザールハルにとつても同様であつたやうに、彼女にも、それは脱かれることの出来ないものであり、その爲にそれと闘ふことが全く無益であると云ふことが、何故にか明瞭に意識されてゐた。

## 五

その翌日、キリーム・イワーノウキツチはいつになく、一寸も外出しなかつた。そして店の勘定の調べに一日中家に留つてゐた。これを見たとき、グラヒラは、恰も氣拔けでもした者のやうであつた。ある心の秘密が彼女を捉へた瞬間、彼女は茫然とした。

『神様！ 私と云ふ人間は一體どうしたことなんでございませう？』彼女は殆んど絶望をもつて思ひに沈むのであつた。

戸外はあだかも眞夏の炎天で、家々の屋根は、太陽の直射を受けて、目を向け

ることの出来ない程ざらつき、青黒い空は、茫莫としてゐた。牝鶏は、垣根の下の日蔭で、羽を逆立て、圓くなり、鎖に結へられた犬は、巢箱の傍に長く寝ソベリ、長く赤い舌を垂れて、苦しげに息づいてゐた。塵まみれのブリアン草は、炎熱に葉を縮ませてゐた。「セノーイ」の廣場は、まるで全く枯渴し盡し、見渡す限り陽炎の波が燻つて居り、そして反対側の白い屋根の並びは、陽光が白熱して、見るからに氣持悪かつた。

キリーム・イワーノウキツチは汗ばんだ體を眞赤にして、胴着一枚で椅子に腰を下し、やつと濕つた指先で算盤を握り計算を續けてゐた。母親の居る氣配もなく、家の中は死のやうな静けさに返り、たゞ無数の黒蠅がうるさく飛び廻るので、それ丈けが僅かに家の中の静寂を壊してゐた。

ザーハルは朝から、自分の部屋に閑ち籠つてゐた、彼の部屋は、ペランダに面した、この家の中では最も涼しい場處であつた。彼は、グラヒラの姿に目を觸れ

なかつた、亦彼女が何處に居るかさへ知らなかつた、しかし二人の心を結合する或る内部の交渉は失はれてはゐなかつた。ザールは仕事に掛らうとしたが、グラヒラが家の中の何處かに居るといふことを感じると、何うしても仕事には手がつかなかつた。そして彼の全心はそのことで、そそり立てられた。深い惱みに襲はれながら、たゞ、彼女のこのみ思ひ煩ふた。

彼の舉動は、一見、平常と變りはないかの如くであつたが、心の中は盗人のそれのやうに偽つてゐるものであり、しかも家庭内の働きの人達は、彼が何を考へ込んでゐるか、何を求めてゐるか、亦、何を期待してゐるかを、よく知つてゐた。

キリーム・イワーノウキツチが家に居る間はグラヒラとしては、どう苦心しても、ザールの許に忍び寄る方法は到底なかつた筈であつた。そのことはザールを益々失望せしめた。

グラヒラは、又、彼女で、熱病患者のやうに苦み惱んだ。彼女は心の均衡を失

つて寢室から臺所へ、臺所から玄關先へ、家中をうろつき歩いた。そして彼女は苦悶に充ちた眼を持つて時々、青空を見上げたり、干固つた廣い庭を見渡したりした。はては家事の手傳に加はり、下女と話し合つたりしてもみた、けれども彼女の頭の中から一瞬も離れることのない、變りない同一の考へ、——ザールのことと、そして彼が自分をきつと待つてゐるに違いないと云ふこと、ただこのことのみに心を奪はれ、何一つ落ち着いて手にはつかなかつた。

何故に、彼女はザールの許に行かねばならないのか、それはグラヒラ自身にも解らなかつた。が、その無明の力は不可避的の運命として、彼女自身よりも強いものであつた。

グラヒラは、氣を紛らすために、次から次に仕事を思い出した、けれども悉く失敗に終つてしまつた。で彼女が全く絶望に陥つたとき、彼女は姑の處へ行つて糸を買ひたいので町に出ることを願つた。

『お待ち、午後になつたら、私も一緒に行くのだから、』と姑は云ふのであつた。

遂に、彼女は運命の前に脆いてしまつた。

彼女は廊下に脱け出ると、そこで算盤の音を耳にしながら、なほも音を忍ばず爲めにスカートの裾をからげ、鼠のやうにザーハルの部屋にそつと這入り込んだ。

寢室の側を歩き過ぎるときに、彼女は夫の肩先を見、しかもキリム・イワノウキツチがチラと自分を見たやうにさへ思つた、がそれは彼女の行動を思ひ止まらせるには足らなかつた。

ザーハルは卓子の脇に腰掛けてゐたが、グラヒラの姿を見たときに座を立たうともせず、無言で何とも言葉をかけなかつた。ただ彼はそのとき一寸の間顔を赫めただけであつた。グラヒラはほんの僅かの間、戸の一方の端の處に身をすりつ

けて佇み、肩越しに頭を後に振向けると、鋭く聞き耳を立てた。應て戸口を離れ、緩やかにまるで力抜けたやうに腕をぐつたりと垂れ、ザーハルの側に歩み寄つた。彼女は伏目になつて、そして彼の正面に大膽に立つた。ザーハルが彼女の手首を握つたかと思ふと、彼女は素速く訴るやうな瞳を彼に注いだ。いま、彼女の面には一切の犠牲をも忍ぶ、淋しい微笑が湛よい、頬はかすかにバラ色に染められた。しかしその胸の中には苦しい呼吸がはづんだ。ザーハルはその儘彼女の腰を抱へ、自分の體に近く引寄せた。グラヒラは従順に彼の體に寄り添ふた。彼女の着物を通して彼女の體の冷たい感觸が傳つて來た。かくして彼等は、やや暫くその儘座つてゐた、その先どうしてよいのか知らずに――。やがて、ザーハルは彼女を抱き、蹲んで、唇、頸、胸に接吻を續けた。その皮膚は薄く、僅かに汗で濕ひ、唇は柔かくしとやかであり、そして唇を通して冷い齒が感じられた。彼女は接吻にはこたへなかつた。たゞ眼をつむつたり又は瞠つたりして、激しい息

遣をつづけた。狂はしい、慘忍な慾求が彼を捉へた。彼は、隣室にはキリム・イワーノウキツチが居て、そして戸口の側をば絶えず誰かが往來してゐるかも知れないと云ふことを、忘れてしまつた。そうしたことは、彼にとつては問題の場合ではなかつた。彼は凡ての何ものも念頭に置いてはゐなかつたことだらう。グラヒラは彼が、彼女を寢臺の上に押付けたとき、それを少しも拒みはしなかつた。そして無中に、神への犠牲のやうな沈黙をもつて、彼の行爲を許した。

この瞬間、一切は終りを告げた。彼女は其の持ち前の藪睨みの黒味がちの目を見開き、ザーハルをちつと噴めた。それは絶大の幸福そのものに酔ひ狂ふ人間の眸差しでなければならなかつた。靜かに溜息をもらし、彼女は、ひしと彼の頭を抱き占めた。

## 六

その後デーキイ家は、一瞥したところでは別に變化もなく、凡ては従前通りの外觀を保つてゐた、キリム・イワーノウキツチが家計萬端を切廻してゐることと、母親アンナが、神棚に燈明を點けたり、小言を依然つづけることと、白痴が娘達の尻を追廻はしてゐること、勞働、食事、罵言、貯蓄と、一切は従前通りであつた。

しかし、少くともそれが永久に賦與されたところの運命と思はれるやうな、この平凡な生活の中に、グラヒラとザーハルの二人の生活は、今、恐怖と、歡喜に

満ちた、彼等自身のものである、特別な、秘密な生活であつた。

一旦グラヒラが、彼に許してからと云ふものは、ザールは兄の妻に對して深刻な、殆んど獸的な劣情の奴隷となつてしまつた。彼は最早、彼女の動作を、唇を、そして頸を、スカートから現はれた華奢な足を、平氣な心で見逃すことは出来なくなつた。それ等は彼に苦痛を與へ、慘酷にまで彼の心を挑發するのであつた。終日、思ひに煩悶することは、ただいかにして彼女の許に行くか、そしてどんな具合に彼女にからかつてやらうかと、そのことだけで彼は惱んだ。重い罪惡が實行されつゝあると云ふ意識が、ボンヤリ乍らも思ひ浮ばれ、そして、よし、それが抱擁の真中にでも、グラヒラは兄の妻である、と云ふことを思ひ浮べると、それはより一層彼を刺戟するものであつた。

グラヒラも、同時に蕩酔の境に耽つた。彼女は突然に戀のあらゆる甘美を見出し、自分の全部……心も身もすつかり投出してしまつた。彼女はめつきり美

しさを加へ、そして爛熟して來た。何故か彼女は急に、浮々として娼婦的な表情を見せてきた。無邪氣な態度はなくなつて、目は絶えず輝き、唇は血塊のやうに赤く變つた。ザールと同じくグラヒラも、或る一つの事實に、終始氣を奪はれ、ほんの僅かの機會を捉へては、戀人の許に走り寄つた。物置きの中、土藏の蔭、菜園畑等は、彼等の密會の場所となつてゐた。それ等の場所に於て彼等は、労働者やキリーム・イワーノウキツチ自身にさえ、危く發見されやうとしたこともあつた。そして、彼等を救ふ本當に幸福な機會と云ふのはほんの數回に過ぎなかつた。グラヒラの意中は常に恐怖にかられてゐた。こうした不斷の危険と、永久的な物足なさは、却つて二人を一層狂熱的に導くのみであつた。彼等はお互に、しみじみ語り合ふ機會は極めて稀であつた。彼等の關係は益々肉慾的に傾いて行つた。グラヒラは、キリーム・イワーノウキツチの妻として、従前に變るものではなかつた。實際彼女としても、それ以外であり得るとは夢にだも思はなかつた。妻と



しての義務に對しては、しかし、彼女は倦怠と、悲哀によつて、果しこそすれ、決して逆ひはしなかつた。で、キリーム・イワーノウキツチにしても、彼女を疑つてはゐなかつたのである。一方ザーハルとしても亦、彼女の、その妻たるの立場にあることに就ては、問題にしてゐなかつた。グラヒラはキリーム・イワーノウキツチの法律上の妻であり、そして彼女がその夫と同衾することは全く當然のことであることは、ザーハルもよく知つてゐた。それにも拘はらずどう云ふ譯か、グラヒラの一寸した眼眸によつて突然彼に嫉妬の念が起り出すことがあつた。

變姿祭(八月六日)の當日、キリーム・イワーノウキツチは、重要な關係にある得意先の商人の一人を招待した。祭日には一般に晴衣を着飾る習慣があつたのでグラヒラも緑色の絹の衣服を着た、とそれがまた黒味勝らの眼と、黒い髪をした彼女に非常によく似合つた。御馳走は運ばれた、各々の嗜好物や、それからその場に適當した會話が交はされて、それは整然として寧ろ儀式的に行はれた。ウオ

ツカの三瓶と、赤い教會酒二瓶が飲み干された頃、キリーム・イワーノウキツチと瘦せて髯を剃り込んだ、そして長裾の黒いフロツクを着た客の老人は眞赤に酔拂らい、すつかり陽氣になつてしまつた。老人は美しいグラヒラが非常に氣に入つたやうで、老人はその小さな油、切つた目で彼女を眺め、キリーム・イワーノウキツチに目くばせしながら云つた。

『フーン、なる程……ナ！ 女としちや先づ申し分なしか!』

グラヒラはカツと顔色を變へ、そして澄し込んで下をうつ向いた。母親はお役目的に不平を口にしながら言葉を挟んだ。

『そんなこと云つて、あれが赤面するぢやありませんか、いつになつても氣の若い親爺さんネー。』

老人は一本しかない黒くて汚い齒をむき出して笑ひこけた。そして言返した。

『おかあさん、誤魔化したつてだめだ、俺にしろお前さんにしろ若けえ時分に

や、好いこともあつたあネ……。」

食事が終つた後で、皆は客を見送つて室内から出た。キリーム・イワーノウキツチとザーハルは、敬意を表して客を馬車の處まで案内した。グラヒラと母親は玄關先に立ち、絹の肩掛けを垂らし、腰の邊で手を組んでゐた。

別れの挨拶が済んで、老人は自分の馬車に昇り、手綱を取るとグラヒラを見遣り、もう一度キリーム・イワーノウキツチに目くばせして、

『他山の石と云ふ譯か！』と云つて笑ひ出した、そしてその肥つた商人向きの馬を駆け出さした。

『お氣嫌よう！』

跣の若者が輕快に老人の後に飛び上り、勢ついた馬車は跳込みを打ちながら開かれた廣い門を曲つた。老人はすぐに腰を下して綿帽子を深く被つた。その骨ばつた頑丈な肩を見るにつけて、彼がほんの今先まで、冗談云つたり笑ひこけたり

してゐたその老人とはどうみても思ひよらなかつた。老人の脊を、兩手で抱いてゐる若者の素足の足先が、ぶら下つてゐた。皆は客を送り出してしまふと部屋に戻つた。

『まあ！ いい鹽梅にいつた』老人との取引が、思ふ壺に入つたことを思ひながら母親は云つた。がキリーム・イワーノウキツチの考へは違つたところにあつた。彼は老人の冗談で赤くなつて、ひどく亢奮してゐる妻の側を歩きながら、からかい半分に指でグラヒラの胸をつつき、同じように彼女に目配せした。

『まあ！ うるさいネ！』とグラヒラは吐き出すやうに云つて、痲癢を起すと荒々しく次の部屋に飛び込んだ。

『怒りだしたよ』とキリーム・イワーノウキツチはからかつた。そして弟に向つて強いて高慢らしい口調で云つた。

『だが、俺の鼻もどうだ、まんざらでもないな、エ？』

ザーハルは態と目ばたきして黙りこんでゐた。そのとき彼は次のやうなことを考へた、「可成り酔つぱらつてゐる兄は、すぐにも寢込んでしまふだらう、そして母も息抜きに一休みすることだらうから、そしたらグラヒラともゆつくり落合ふことが出来る譯だ。」しかし兄の云つたことが一つの暗示のやうにも思はれて彼は惱ましかつた。

ザーハルの期待は實現しなかつた。と云ふのは、母とグラヒラとはご馳走の残りものを戸棚の中に取りしまひ始めた。ザーハルが窓際に座つて廣場を眺めてゐた頃、兄はぢれつたさうに聲を顫はし、大聲に、寢室からグラヒラを呼んだ。

『グラセンカ!』

特に甘つたるい狡さを含んだ彼の聲の調子に、グラヒラもザーハルもすぐと、その呼んでゐる意味を推測した。とグラヒラは素速く、一瞥をザーハルに投げた。この瞬間の彼女の一瞥の中には悲哀と、まゝにならない女の辱恥とが物語られ、

従つてこの一瞥はザーハルをして、彼の全身に湧き立つ血潮が一時に頭に漲るのを覺えさせた。

『グラシーヤ!!』とキリーム・イワーノウキツチの叫び聲が、再び聞へて來た。グラヒラは手にしてゐた皿を置き、その命に服し、ザーハルの傍を通り過ぎるとき、軽く彼の着物を掠めて無言の儘寢室に姿を没した。

母親も休息するために立ち去つた。家の中は忽ちもの影もなく、ひつそりと静まり返つてしまつた。ザーハルはただ一人、部屋に居残つて、空しくグラヒラを待ちつづけてゐた。そして彼女は戻つて來ないことを知つたとき、無駄に待ち設けたことの腹立たしさが、鋭く本能的な兇惡の心呼び起し、彼の心は新しい感情に燃へ立つた。先づ始めにザーハルは、グラヒラは自分一人に屬してゐるものではなかつたと云ふことをはつきり心に描き、それと同時に彼は、その部屋と部屋とを遮つてゐる壁を通して、寢室で行はれてゐることの姿が見えるやうな氣が

した。憤怒に燃ゆる想像をもつて、劣悪な、ふしだらなその場の光景を目の先に  
思ひ浮べた彼の全身の血潮は沸き返り、重苦しい胸の呼吸は今にも絶えてしまふ  
かと思はれた。

ザーハルはそうした氣持を紛かそうとして、強いてグラヒラは兄の妻であつて  
妻としての義務を果すのに何んの不都合がある筈もなく、彼女には罪はないんだ  
と思つてもみた。けれどもそう考へることは、非常に困難な苦しいものであつた。  
反對に、彼女は仕方なくその義務を果してゐるのではなくて、寧ろ彼女は進んで  
夫の抱擁に彼女自身が満足してゐるやうに思はれた。

それはザーハルをして憎悪と絶望によつて、去就を忘れさしてしまふまで恐ろ  
しいものであつた。彼は今にも叫び上つて寢室に跳り込み、髪の毛を引搦んでグ  
ラヒラを寢臺から引づり落し、衆人の面前で彼女の假面を引き剝いでくれるか、  
それとも一思ひに殺してしまふ、かたさへも思つた。しかしそうしたことを決行

する力もなく、極度の悶えの心に一人惱みつづけた。

夕方、皆がベランダで茶を飲んだ。碧空に紫色した太陽も、除々と土藏の屋根  
の彼方に落ちていつたが、なほ、ベランダの硝子は、溶けるかと思はれる程焼き  
つけられ、實に息詰まるやうな暑さであつた。グラヒラは赤く汗ばみ、髪の毛は  
額に粘りついてゐた。彼女は茶をついで廻つた。母親は口笛を吹くときのやうに  
薄い唇をとがらし、眼を白くして懸命に小皿を吹いてゐた。蒸しつけられる暑さ  
で全身びつしよりになつたキリーム・イワーノウキツチは、なほ苦しい夢からす  
つかり醒めないやうな風で、幾杯となく續けて茶を飲んだ。皆は押し黙つて、た  
だ流れ落ちる汗を絞りながら吐息をしてゐるだけであつた。ザーハルは鋭い險惡  
な眸差しを他の人々に氣付かれないやうにして、グラヒラに時々差向けてゐた。  
彼には彼女が安らかさうに満足して、しかも幸福であるかのやうにさへ見えた。  
彼は彼女を憎み兄を怨んだ、そしてこの二人を一思ひに殺して了たい氣さえした。

グラヒラは、確かに始めから彼の心意を察してゐたと解してよかつた。と云ふのは彼女の手は人目に立つ程顫えてをり、そして彼女は、努めてザーハルを見まゐりとしてゐたからであつた。

お茶が終つた頃には、太陽も沈み、真紅に燃え立つてゐた陽炎も土蔵の屋根の上方に消え、餘光の弱い影が庭先にさして、微かなすがくしい涼風が漂ひ始めた。母親は家事の世話に立ち去り、キリーム・イワーノウキツチは玄關先に出て行き、そこで涼むために腰を下し、胴着を脱いでばんやり前方に視線を投げてゐた。

ザーハルはグラヒラが食器を纏めたすと、更に又一杯を飲み干した。彼女は皿を取らうとして食卓の上に身を差し伸し、それがいかにも偶然だつたといふ風に怖々と、しなやかにザーハルの手に觸れた。と彼はぶるつと身顫して彼女に眼を投じた。そして彼に注がれてゐる彼女の罪と祈りとの表情の籠つた黒い、スガ眼を、見たとき、突然萬事は過ぎ去つた空虚の殘骸であることを思ひ起し、荒々し

く手を引こめた。グラヒラは何か言葉をかけたい様子であつたが、ザーハルはつと立ち上ると玄關口の方へ出ていつてしまつた。彼女は悲しい驚きの眼をもつて彼の後姿を見送つてゐたが、思はず手にしてゐた皿を取り落してしまつた。

『おい！ お前またそこで……』とキリーム・イワーノウキツチは腹立たしげに云ひ放つた。

グラヒラは恐怖に身を慄はし、鼠の様に音も立てず破片を拾ひ集め始めた。

玄關先に腰を下したザーハルは、シガーを口に當て地上に眼を投げてゐた。キリーム・イワーノウキツチは今日の客のことで話を持ちかけたが、ザーハルにはてんで相手の云ふことが耳に入らず、ただ熱心にペランダの方の躑音と食器の音に氣を取られてゐた。彼は自分がいかに亂暴にそして慘酷にグラヒラを侮辱したかをはつきり意識した。しかしそれはただ彼に病的な兇惡な満足を與へたに過ぎなかつた。

『彼女には、これ位のことを加へてやつたつていいんだ』彼はこう考へた。

グラヒラは長い間ペランダで働いてゐた。そして遠くからザーハルに視線を送り、彼の合圖を待った。しかもザーハルは意地悪く別の一方を瞞め、彼女のことなどには無関係であるかのやうな素振を装つた。彼女は、二度程家の中に出這入りして、食器の片付けがすむと行つてしまつた。ペランダの邊はひつそりと静まつた。突然ザーハルは、ひどく或る淋しさに襲はれた。彼はグラヒラが可哀想になり出し、その爲どう云ふものか、小心に、心がおびへ出した。

キリーム・イワーノウキツチは無頓着で、両手を突張り太つた腹を前方にのしかけ、ゆつたりと自信のある見解をもつて次のやうなことを述べた。

『堅實な老人だ！ 驚くことに五十萬と云ふ財産を持つ身でありながらなほ農奴のやうに働くと云ふぢやないか、八十の歳を越してゐるといふのに……短い生涯ぢやないよ……俺も彼の家にも行つたことがあるが、整頓したもんだ……その

息子達と云つても既に白髪のある年輩だが、親爺の前に座るなんてことはしてんでないんだ。厳格な老人なんだ！ 娘達と云へば、一流の富家に嫁いでゐるし……知事でさへ彼には尊敬をもつてゐるからネー……。それは一體どういふ譯か？ といふのも他ぢやない、彼が終始自己の運命に忠實であるからなんだ。彼は常に云つてゐる、「自分は商人だ、だから商賣以外の他の凡ては自分にとつては無関係なことである。俺の目的は、資本を蓄積して、しかもそれを安全に子孫に譲るにあるので……子孫の繁榮の爲なんだ。」と、だが老人も女のためには随分と、金を振り撒いたもんだよ。獨身に加へて健康體と來てゐんだ！ それあ！ 女をだつて可愛がつたさ、それもそうさ相等に働いて來たんだもの、その位のこたあ！ 當り前のことさ。』

白い被布をしたグラヒラの姿がチラと見えた、と思はず、ザーハルは身を顛はした。裏木戸の方にあたつて門のくぐり戸の音がした。

『お互は、何の爲めにこうして生活してゐるんだ？』

さつきの食事中のことを思ひ出しながら、キリム・イワーノウキツチは哲學的な頭になつて考へるのだつた。

『我々は、それ／＼自己の満足を求めらるるものであり、そして人間には各自の運命といふものがある……適者は榮達するし、弱者は滅亡してゆくのだ。これが法則なのだ。試みに、自由だとか平等だとか喧しく云ふものがあるが、そんなことは俺の見解の範圍からすれば空虚なことなんだ。それはだ、若しお前が法律の道に適つて生活し、一定の仕事に働いてゐるとする、そしたら何人もお前に干渉する権利はないんだ。彼は勞働者であり、俺は商人で、お前は、假りに官吏か將校とする……各人はそれ／＼の方面に従つて、相當の義務を果す責任がある。斯くしてこそ社會の秩序は完全に維持されてゆくんだ。若しも、各人が例へそれが善良な事であるとしても、皆が同一のことだけを選んで向つたとしたらどうなる？』

それこそ凡ては無茶苦茶だ！ 吾が國民は一體無智だ！ 彼等には想像力なんかありやしない、彼等は、勝手に争闘し合ひ、結局は共倒れで潰されてしまうくらいが關の山だ。ただそれだけなんだ。野蠻な國民だ！ 今一步譲つて考へて見ても、各自が悉く金持ちになれることは不可能なことぢやないか、この地上には、それを容れる程の富はないのだ。と云つて凡ての者が乞食になればいゝと云ふ譯も云へないぢやないか？』

『勿論、それや、そうかも知れない』とザーハルはいい加減に調子を合した、心の内ではグラヒラが外出した行先についての想像で一ぱいであつた。

『いや待て！』と途中で言葉を遮つて、熱して來たキリム・イワーノウキツチは更に言葉をついだ、『凡ての者は食はんと欲してゐる、だから各々が働いてゐるんだ。教會も、國家もこの必要に對して産れたのだ。で若しお前が、乞食に物を恵んだとする、と彼はそのために反省をするだらうか？ 生活といふものは、

そんなものぢやないのだ。詩人も云つた「労働は、人間に悦びや満足なものとして與へられたものでなくて、その罰として賦與されたものである」と、誰が好んで、自身で自分を罰する奴があるものか？鞭の必要があるのはそこなんだ……。」

『キリーム・イワーノウキツチ！』と、玄關先に歩いて來た一人の労働者が云つた。『あちらで、小供達が金を受取り度いと云つて待つてゐますよ、この間貴方がお約束されました』『約束したが、どうした』とキリーム・イワーノウキツチは顔を少々曇めた。『落着いて話をする暇もありやしない』彼の今迄の温良な表情は忽ち怒りつぽい面相に變つた。

ザーハルは彼の言ふことに、かなりいやになつてゐたので、これを機會にツツ立ち上つて、家の中に這入つて行つた。家の中は既に暗く、ひつそりと静まりかへつてゐた。恰も空家の様な感じを與へるのであつた。彼は帽子を被り、暫く躊躇して室の中央に突立つてゐたが、突然爪先立ちに廊下を通り抜け、裏木戸を出

るや否や駈け出した。

門の外には、労働者の一群が集つてゐた。或る者は、突立ち、或る者はベンチに腰掛けてゐた。彼等はマホールカ(下等煙草)を吹かしながら唾を吐き、頻りと誰かを罵つてゐた。ザーハルがぐぐり戸から往來に出たのを見ると、彼等は云ひ合せたものゝやうに、びつたり話を止めて、黙つて目で彼を目送り、そして彼が大分歩いて行つた頃、彼等の中の一人が、餘り大聲ではなかつたが、しかしはつきりと聞き取れる程度で、『情婦の後を、追掛けるんだ。』と云ふと、それにつれて皆が一度にどつと笑つた。丁度牡馬の群が一聲に嘶いたかのやうに。

ザーハルはその悪口を耳にはしたが、しかしグラヒラのこのみを思ひつめてゐたので、それらの言葉の裡に含まれてゐた恐しい意味をも、心に留める餘裕はなかつた。彼は散歩してゐるのだと思はせるやうに廣場の中央に出て堤の上に登り、そして直ちにグラヒラの姿を見出した。



彼女は河邊を指して歩いてゐた。肩掛が、灰色の殺風景な廣場の中に目立つて白く浮出してゐた。ザーハルは一目見ると、彼女が歩いてゆこうとしてゐる目的地をすぐと察した。といふのは、橋を渡つて青い廣々とした芝地になつてゐるその川境の附近には、白揚の老木が茂つてをり、その芝地は曾つて二人してしばしば来たことのある想出深い場處であつた。グラヒラが先程、殊に外庭を通り抜けていつたのは、ザーハルに自分の後を追はせるために態々試みたものであつたやうに信じられた。

ザーハルは四圍を注意深く見廻した。家々の窓は暗くボカされ、労働者達はすでに邸内に歸つて、門の外には人影すら見えなかつた。邸内から微かにキリーム・イワノウキツチの怒鳴り聲が聞へた。

ザーハルは忍ぶやうにして堤の上から下り、もう一度不安さうにあたりし目を配つた、そして足を早めてグラヒラの方へ驅けていつた。

川の上空は暮色を帯びて湿々した涼味を一抔に湛へてゐた。幸なことには休日だつたので煤けた鍛冶屋の戸も閉められて、橋の上にも人影はなかつた。躑てザーハルは芝地に行き着いた。

グラヒラは、深い湿つた草叢に踏み分けられて出来た道を歩いて、既に遠く行き過ぎてゐた。彼女の白い肩掛が緑の月の光に照されて、それが氣持よくちらついて見えた。

彼女はザーハルの足音を聞きつけたのであつたが、彼女は急ぎの用事で歩いてでもゐるものゝ様に、さつさと振り返りもせず前方に歩きつゞけた。そして丁度二人がエニシダの蔭に這入つたとき、彼女はふと、立ち止つた。そして彼に振り向き、悲しさうな、しかし、魅惑的な微笑を泛べた。ザーハルは彼女の燃えるやうな唇やふくよかな肩、肉付きのいゝ體格等に目をつけた。今、彼女は彼の前にこれ迄になかつた程の艶麗な姿となつて、彼の目に映じたのである。しかし、彼

女の懺悔に似た微笑は、彼をして頭の中が逆上して混亂する程、彼に憎惡の念を燃へ立たしめた。

彼の眸差しは餘程もの凄かつたに相違なかつた。なせと云ふに、彼女の微笑は瞬間にして消失せ、その顔が急に蒼白く變つていつたからである。

『ゾーニャー……まあどうしたと云ふの、ネエ！どうしたの！……』彼女は吃りながら、突然早口に云つて、片手を差し上げた。

この動作は、とつさの間に何ものかを決心したかの様であつた。ザーハルは僅かに拳を振り上げ、グラヒラの頭をいやと云ふ程撲りつけた。グラヒラは哀しい悲鳴を上げ、よろめいた。肩掛は舞ひ落ち櫛は抜きとれて叢の中に飛んだ。彼は自分でも信じられない悦樂を内部に味ひながら、更に又一撃を加へた、グラヒラは二度目の打撃で地上にはひつくばり、聲を立てて泣き出した。

思ひがけなく憐憫と恐怖と絶望の念がザーハルの心を襲ふた。暫らくは彼は忘

失したやうに泣きくずれてゐるグラヒラを凝視してゐたが、臆て素早く背を返して一方に立退き、そして白揚の老木の冷く荒い幹に、ひたと額を押し當てた。彼の心は空虚と暗黒の外何ものもなかつた。そして彼は、二人の關係の一切が、今その終局をつげたことを思つた。

『さあ！ これで萬事だ』彼の腦裡は絶望の中に旋廻した。

と、偶然に二ツの暖かい肥つた手が後から彼をかき抱いた。そして、重い柔かいグラヒラの體がびつたりと彼に寄り添ふた。自分の意識を疑ひながら、ザーハルは振り向いた。グラヒラは彼の頸に手を組んでぶら下り、まだ涙で濕んだ、そして、それは彼には懐かしい心持のする、ヌガ眼の黒い瞳で、ちつと下から見上げた。しかも、彼女の唇には亢奮した微笑がさ迷ふてゐた。

『侮辱したり、……打ち叩いたり……まア、何としたことなの……』と彼女は恰も感覺を失つたものゝ様にこぼした。

ザーハルは今、嫉妬も、憎悪の念も、そして絶望の心も、いづれにか鬱散してしまつた。そして、緑の壁によつて全世界から隔離されてゐるやうな、この湿つた柔かな草の上に、彼等二人丈けが出現してゐることが、彼自身、不思議な様な気がした。

それから彼等はやゝ暫くの間、岸邊の草の上に座つてゐた。グラヒラはザーハルの膝の上に胸を乗せて横はり、彼の指を自分の温かい丈夫な指で敷へながら、語りつづけた。

『でも、あなた、私が惱んでゐないと思つてゐて？ あの人……年のいつた不愉快な人ぢやないの！ 私あの人をちよつとだつて愛してなぞゐませんわ……。そりや自殺した方がいゝと思つたことも、幾度だつたでせう！ では私、どうしたらいいと云ふの？ ザーハルさん……ぢや私もう決して……ですけれどあの人いろくくと氣を廻してよ、そのときはどうしたらいいでせう？』

ザーハルは彼女の言葉に耳を傾けながら、次第に黒すんでゆく川向ふの菜園畑を眺め、黙りこんでゐた。彼には亢奮が始まり、哀愁と嫉妬の心が新に彼に喰入つて來た、が、哀愁は靜肅さであり、嫉妬は鈍く、疲れたものであつた。

『ねえ、あの人死んで呉れたら……と思ふのよ。』

突然グラヒラはこゝろ微かな聲で囁いて、首をうなだれた。その爲めにザーハルには彼女の顔が見えなかつた。

ザーハルはただ身を顛はしただけで、再び沈黙に耽つた。

『私、あの人を私の手で毒殺するかも知れないわ……いゝえ屹度よ、譯はありやしないわ。』

瞬間、ザーハルの心の中には暗い喜びが慄へた。しかし彼は忽ち思ひ直し、そして恐ろしさの餘りぞつとした。

『馬鹿なことを言ふもんぢやない。』と彼は言葉を挿んだ。

『いえ、馬鹿なことぢやないわ……。』彼女は頑固にきつと言ひ返した。そして彼の膝の上に折り曲つた體を一層低くしたので、ザーハルは自分の足の邊に彼女の熱い息の吹きかゝるのを感じた。

『だが、それからどうしやうと云ふんだ？』と云つた彼は意地悪く笑ひ出した。氷のやうに冷くなつたグラヒラの指は力なくザーハルの腕をかすめた。彼女は頭を垂れた。

『後になつて解るわ、どうだつていいぢやないの。』と、殆んど聞き取れない位の細い聲で、彼女はささやいた。

二人は黙りこみ、身動きもしないで、尙長い間座つてゐた。突然誰か芝地の向ふで強い音で口笛を吹き鳴した。グラヒラは驚きの餘り身顫ひして頭をもたげた、そして恐怖に満ちた顔をして膝を立てた。

『大變ですわ、ねえ、どうしませう!!』

ザーハルはその音の方へ目を走らして見極めようとしたが、そこにはただ、暗黒の闇があるだけであつた。町の屋根と、教會の黒い姿の上方に當つて、僅かに明るい夕映の線が擴つてゐるだけで、暗がりに蔽はれかけた空の彼方には、遠くそして深い夜空に點々と星の淡い光りが輝き出してゐた。川筋に副ふてその邊の上には霧が棚引き、そして芝地の中も心の滅入るやうな淋しさに包まれてゐた。

ザーハルは心中冷水を浴る思ひがした。家では既に皆が夕食につき、彼等が不在してゐることに氣付いてゐる筈であつた。

恐怖が双方に襲ふた、そこで二人共、草を蹴立てながら急いで芝地を過ぎ、もと来た道に引返した。

それは未だ遠方からではあつたが、既に食堂には窓にさす灯が見られた。一同が食事についてゐることはそれで確かであつた。二人は始んど駆け出さんばかりにして、急ぎに急いだ。グラヒラは嵩じた恐怖のために足が思ふやうに捗らな

つた。それに呼吸がはづんで、ともすれ氣息が詰らうとした。

門の側で、或る黒い影が彼等に向つて近づいてきた。グラヒラは怖々と仕方なくその影の方へ近寄つた、彼女はそれがキリム・イワーノウキツチと思込んだからであつた。ザーハルも同時に悸つとしたが、前方へ歩み寄り拳を固めた。

しかし二人はこれ迄によく聞き馴らされてゐた、とんちんかんのビョーテニカの唸る聲を聞いた、と白痴は大口を開いて笑ひながら行手を遮つた。

『おい、お前は何をするんだ！』

なほ顫えながらザーハルは強く詰問した。

ビョーテニカは早口に喚いて、そして後の方を指して眉を擡めた。彼はキリム・イワーノウキツチが腹立ててゐるといふことを云はふとしてゐたのだつた。そこで彼はグラヒラを指先で突き、そして次に自分の胸を指してみせた。

『さ……散……歩……歩』と慌てて云つた。

ザーハルの心はそれでやつと少し落付いて來た。彼はビョーテニカが凡てを心得てゐて、彼等を、危地から救ひ出さうとしてゐるのだといふことを見てとつた。それはグラヒラが自分——ビョーテニカ——と一緒に散歩してゐたと、彼女が家に歸つてから辯明の出来るように、取りなしてやらうとしてゐるのだと了解した。

『ビョーテニカ、よくやつてくれた！』と、ザーハルは思はず軽い氣持になつて云つた。

『グラシーヤ！ 彼と一緒に行くつてくれ、……一緒に散歩したのだと云ふのさ、……そこはうまくね。俺は後から、市からでも歸つて來たやうに裝つて行くから……』

グラヒラは直ぐと合點した。が、なほまだ躊躇してゐた、兎に角彼女はそれがまた恐ろしかつた。

『お行きよ、……お行きよ……何でもありやしない。』と云ひながらザールは優しく彼女を押し出すと、素速く身を返して今来た路へ引返していった。

彼は彼女がくぐり戸を開いて這入つていつた彼等の発音が玄關の方で軌るのを聞きながら後にただ一人で残つてゐた。やがて彼は、ふと、さつきの門の外で耳にした、彼に浴せられた労働者の悪口を思出した。そして自分達の関係を知つてゐるものは、ビョーテニカ一人でなくて、外にまだ労働者達の全部も、或は更に町の人々の凡てまでが知つてゐるのかも知れないと云ふことを悟つた。この想念は、彼として心中冷水の思ひであり、そして自ら恐ろしい危地の斷崖に立つてゐることを思はずにはゐられなかつた。

七

グラヒラとザールの不倫な関係については、事實母親と本人のキリーム・イワノウキツチとが知らずに過ごしてゐただけで、その他の家の者は皆感付いてゐたけれども、そのことに就ては誰も口を噤んでゐた。それといふのも彼等は等しく主人を嫌悪してゐるので、主人の不名譽のことを寧ろ心好く思つて北叟笑んでゐたからである。そして老人達はグラヒラとザールを常に非難したが、若者連は冷笑をもつて看過し、寧ろザールを偉いものだと言ふてゐた。

『彼は赤い舌を出してゐるんだ……偉いもんだ。大將の鼻をあかしたといふも

んだ！ いゝ年してからに、若い女を嚙にするなんて大體量見が違つてらあ！  
まあ堀つた穴に自分が落ち込むやうなものさ。」

キリーム・イワノウキツチは、白痴のビョーテニカが彼の脊後へ突立つたのを、女工達が袖で顔を隠しながらクス／＼と笑ひこけたので、それと氣付いた。彼が振向くといつてもそこには常と變らない無表情の鈍い眸差しの阿呆づらをした顔が、自分に注がれてゐるのを見た。

『貴様！ 後でお覺えてゐやあがれ！』と常にこう云つて、ビョーテニカを指で示しながら脅しつけた。

しかし彼は、ビョーテニカがあゝした真似をする、その理由の根源を確とつきとめて置かうと決心した。しかも或時彼はビョーテニカが彼の脊後から、ナイフを握つて迫つてゐるのを運よく發見した。

キリーム・イワノウキツチは沈黙を守つて、そして強いて何事もなかつたか

のやうに装つた、が薄暗い家の中に戻つて來たとき、大膽にしかもいそいそと廊下を通つて、何處へか出て行くグラヒラに出會つたとき、彼は近付きながら輕蔑を浮べた眼で彼女を見送つた。

食事の際、彼は終始人目に立たぬ様に、妻に眼をつけてゐた。そして今更のやうに、彼は美しく、妙にきは立つて爛熟したグラヒラを見出した。

『毒蛇だ、まるで毒蛇その儘だ。』こう一人考へながら、彼は嫉妬に満ちた深い猜疑の心を湧き立たせた。

彼は、突然、グラヒラがまだ處女時代のころ、彼女は如何にもお轉婆でそして大膽な娘であり、騎士連が彼女の尻を追廻したことなどをいろ／＼思ひ浮べた。そして彼女が自分と結婚する以前に、既に戀人をもつてゐたのかも知れないと云ふ考へが彼を恐しい迄に眩惑させた。しかしそれは事實あり得ることのようにも彼には思はれたのであつた。

『或はあつたのかも知れん、俺は？　そうと！　あの時は酔拂つてゐたが、そこには取るに足らない田舎者ばかりだつた筈だ、親爺は、あのお人よしのまるでペテン師ぢやあつたが……』

キリーム・イワーノウキツチは彼の求婚の申出が、存外と手取早く受容られたことの記憶を辿つて考へてみた。その當時は彼は、それはとりも直さず自分の人格的價値と、金力の賜のためであると考へてゐた、が今となつては見解は全く別なものであつた。

『一杯食はされたんだ！　解り切つたことだ！』こう考へると同時に彼の太い頸は紫色に變り、顚顚には青筋が腫れ上つてくるのであつた。

そうした思ひで彼がグラヒラを見るにつけて、彼女に對する彼の苦悶猜疑は、益々募つてゆくばかりであつた。キリーム・イワーノウキツチは、妻には戀人が屹度あるに違いないと考へ、それは疑ふ餘地のない事實であると思ひきめた。が

戀人が果してあるにしても、彼にはその相手が誰であるかを想像することは困難なことであつた。ザールハルに對しては、たゞの一度だつても彼は想像を及ぼしたことはなかつた。彼としては、それは夢にも思浮べることさへ許されないことであつて、想像してさえ羞づべき筈であつた。

一方グラヒラにしたところで何處かへ只の一度でも一人で外出したことがなく常に彼自身、でないなら母親と一緒にだつた。彼は若い労働者達の中に、誰彼と物色してもみた、けれ共そうしたことは彼にとつて、餘りに馬鹿氣てゐるのに氣付いたのであつた。それは自分を裏切つた妻にせよ、憎い妻にせよ、あの美しさをもつた彼女が、何う思つてみてもあの平凡な汚らしい百姓達の誘惑の手に陥るなんてことは考へ得られないことであつた。

『どうして、彼女はそんな女ぢやない。』とキリーム・イワーノウキツチは一人で思ひ悩んだ。



それからの彼の心は猜疑と苦惱に、そして誇を傷けられた腹立たしい思ひで寸断され、彼は惑亂の餘り妻の行動を監視しようとして夜眠ることさへ恐れた、がただ到る處で罪惡と羞恥とを思はせられるのみだつた。しかもこの事に就ては誰にも一言も口外せず、そして妻に對しても、彼女を疑惑の目をもつて見入るなどといふ素振さへ現さなかつた。ただ彼の顔は暗く沈み、心持は氣むづかしさに變つて、妻に對する愛を棄てて恐しい熱心さで家計上の事に奔走した。

チーキー家を蔽ふた暗雲はいよ／＼迫つた。菜園に働く小娘達でさへ、何かしら或る不吉を嗅ぎつけるようになった。

『逃れつこない事だ。本當に困つたことになつて來た。』こう云つて、下女は嘆息を洩らしてゐた。

老人の御者マツウエイは、何故か自身にも解らないが突然暇を乞ふた。

ザーハルとグラヒラだけは、他の何事も氣付かないでゐた。

かの偶然の機會から二人が家を脱出して、幸福を見出した夜からの彼等は、最早凡ての遠慮を振り棄ててしまつてゐた。初の頃こそは、その發端がいつもザーハルの辛抱し切れない氣持から出たものであつて、グラヒラは恐怖で神經が痺れそうにさへなるのであつたが、しかしこの頃は事實その役割は正反對になつてゐた。と云ふのはグラヒラは殆んど氣が狂つてしまふかと思へる位無中になつてしまつてゐた。彼女は既に何者をも恐れなくなり、夫の面前をも憚らずザーハルの許に走つた。それに或る時チーズの箱を戸棚の中に入れようとしたときに、しかも母親の前で戀人を抱擁して接吻した程、思切つた處まで進んでゐた。ザーハルはあつげにとられてしまつたが、彼女はただもう愉快そうに笑ひ出した。母親が『お前何をくすくす笑つてゐるのださ？』と詰問したときも、彼女は萬事が眼中にないかのやうに平氣で云つてのけた。『ザーハルさんに、からかつてゐるの！』

母親は一人怪しげな眼を彼女に注いだ、けで何事も云はなかつた。老婆もやは

り心の中に何か或るものを感じた。たとへそれが疑念としてなほ老婆自身に、はつきりとしなない迄も、老婆の心に残される何ものかがあつた。

それから數日経つた或日のこと、キリム・イワノウキツチは商用でまる一週間の豫定で旅に出ていつた。グラヒラとしては又とない祭日が始つた譯である。

彼女は一切の束縛をその身から取り棄ててしまつた——、夜を待つて、母親が寝につくの都合圖に彼女は襦衣一枚に、裸足でザールハルの部屋に這入りこみ、燃へ立つ情熱に蕩酔しながら、猫のやうに臥褥の中の彼の體へ飛びついた。彼女の情熱は野性的でそして盲目的であつて、際限のない深刻なものであつた。ザールハルは彼女の抱擁から我に返る暇もなく、打ちつづく夜毎は或る享樂の宴となつて、彼女の去つた後のザールハルの寢臺は、敷布や枕は全く皺だらけになつて残されるのであつた。夜が明けて、家の中が漸く灰色になつた頃初めてグラヒラは自分の部屋に戻るのであり、後にザールハルは惱ましい疲れ切つた夢幻の中に我を忘れる

のであつた。

終日彼はぐつたりとなつて、そして意識は朦朧としてゐた。がこれに引代へてグラヒラは、快活になり、生々として以前に増した美しさを加へて來た。

グラヒラは夫が歸宅するなどは、てんで頭の中に考へてゐなかつた。偶々窓外に、見馴れた馬、馬車、そして埃にまみれた御者を見付けたとき、彼女はまるつきり豫期しなかつた恐ろしい不幸に逢遇したかのやうに、心は突き刺される思がした。凡ては今終りを告げて、再び以前にあつたやうな限られた、そして遠しい偶然の密會の時機を待たねばならないときが戻つて來たのかと思ふことは、彼女には恐ろしくさへ思はれた。數日の間は努めて自制して惱みつづけたが、遂に恐ろしい冒險を決心してしまつた。その夜キリム、イワノウキツチは眠り込んでゐた。ぐつすり夜具の中に身を埋め、口を開け嵐のやうな呼吸をつゞけてゐた。部屋にはランプが點つて、彼女の幻影が神秘的に壁の邊に彷徨ふた。そして窓

外は暗黒の闇に包まれた夜であつた。ふと彼女は頭を擡げ、目を光らして敏く夫を覗き見た。彼は何か寢言をつぶやいて、そして太つた腕を僅かに動かしただけだつた。グラヒラは息を凝らしてやや暫く横になつてゐたが、肘を突つて體を起す間も夫から眼を離さなかつた。彼女の心臓は激しく、鼓動は高まり混亂した。全身は熱く燃へて、抑制の心はその絶頂にまで到達した。そして遂に盲目が彼女を支配し始めた。そのとき庭内の遠く近く、既に夜明を告ぐる雄鷄の唳聲が聞へ出してゐた。グラヒラは決心した。彼女は用心深く自分のむき出しの足を、夫の太い胴體の向ふに越し移して手と膝とで體を支へ、足を突出し、床の上に足の觸れたのを感じた。こうして一方の素足を床の上につけ、他の足の膝頭をもつて寢臺に寄りかかり尙暫く彼女は夫の前に身を屈めつづけた。それは丁度彼女が今正に夫に飛びかゝつて、そして絞殺するために夫の動勢を伺つてゐるかのやうな格好であつた。キリーム・イワーノウキツチは身動きもしなかつた。彼女は扉口の

側でもう一度立ち止つた。ボンヤリと照つてゐるランプの明りの中に、一枚の白い襯衣に、むき出しの手と足とをして、黒い髪の毛を振り亂した彼女の様子は、まるで魔女のやうに怪しく恐ろしく見えた。聽て彼の女は闇の中に姿を隠してしまつた。

廊下の壁は青い光を浴びて、そこには石油の香を匂はしてゐる小さなランプが點つてゐた。空氣は息苦しく重かつた。フェルトの敷いてある床の上には、雇人の小娘が眠つてゐた。

グラヒラは影のやうに召使の小娘の傍を迂り抜けて、廊下傳ひに母親の寢室になつた扉口の傍を通つてザールハルの部屋に姿を消した。彼女は眠つてゐたと思つた小娘が、寢ぼけた顔をむつくり持ち上げて、自分を見過したことも氣付かないでゐた。

『情男の處へ忍ぶんだよ、なんて大膽な女なんだらう。』と小娘は羨しそうに一

人思ひ耽つた。

ザーハルは眠つてゐた。そしてその部屋は眞暗になつてゐた。グラヒラは手探りして寢臺を探してゐたが、ふと彼の足に觸れた。がザーハルは身動きもしなかつた。グラヒラは彼の足、腹、胸と手探りしていつて、最後に彼の顔の處に觸れた。そのときザーハルは屹驚して身を起した。

『誰だ？　そこにゐるのは誰だ？』と彼は寢ぼけ氣味で鋭く怒鳴つた。

そして突然彼は温い素手を捉えた。初め彼は、それが誰であるか像想さへつかなかつた。がグラヒラは無言の儘で毛布を捲り上げると、燃へ狂ふやうな體をひたと彼に寄せつけて、披げられた廣い胸を壓しつけた。そして彼女の熱い燃えるやうな唇は、闇の中に彼の唇を探してゐた。彼女のバラ／＼になつた乾いた髪の毛は彼の顔の上に一杯掩ひ被つた。と、ザーハルは餘りのことに、急に恐ろしさを覺えた。

『どうしたんだ？……どうしたんだ？……まるで氣狂ひぢやないか！』と彼は急ぎこんで言つた。

しかしグラヒラは彼の口を自分の唇で抑へつけると、やがて彼の顔、頸、胸、腹と續けざまにその熱したキッスを以つて埋めた、それは丁度狂人のもつ眞剣さであつて、彼女には今恐怖などの念は消え失せ、何の思ひ煩ふこともなく、一切を上げて野性的情慾の奴隷となつてゐた。

この夜から彼女は、しば／＼夜になつて、夫の床を離れるやうになつた。ザーハルは最初の中こそ、彼女に忠告を與へもしたが、後には自から手を振つて、遂に彼自身が夜毎、彼女の來るのを待つようになつた。『どうなつたつて仕方がない、結局はなるようにしかならないんだ。』彼の心には、こうした氣持が働いてゐた。

こうして過ぎた或夜のことであつた。キリーム・イワーノウキツチはふと目を

醒ました。と妙に物足らない淋しさから、それと氣付き屹驚した。ランプは何時もの通り點されてあつたが、グラヒラの場所は空になつてをり、しかも既に冷くなつてゐた。初めキリーム・イワーノウキツチは詮索もしないでゐたのだつた、が突然、恰も誰か彼を突き飛ばしたやうに我に返り、むつくり起き上つて座り直つた彼は最初グラヒラは朝起きたことと思つたのだつた、それにしても邊に人の氣配のない譯はないし、それに開いてゐる扉口の外はしんとして暗かつた。

凡ゆる猜疑の念が一時に頭に押し寄せてきた。先づ初めにザールに關する恐ろしい豫期しなかつた心が彼を一杯にした。彼は氣が遠くなつてしまつたかの如く、寢臺に腰打かけて、太い丈夫そうな毛脛の足を床の上に投げ出しさてどうしたらいいものか解らなかつた。彼の頭の中に浮んだ考へは、如何にも恐ろしいものだつた。で彼はグラヒラが姿を隠したことに對しての凡ゆる説明を工夫しながら、その恐ろしい想念を拂ひ退けようとした。

しかし折の悪いことに、丁度その時扉口の暗い空氣が搖れて、その中から白い影が浮び出て來た。グラヒラは素早く部屋の中に這入つて來た。空氣の搖れた爲めか或は他の原因であつたか、ランプの灯が急に明るく燃へ立つて、剃き出しになつた彼女の肩と足と、そして襯衣の解きほどかれて皺くちやにされてゐる彼女の全身をまざく／＼と照し出した。

夫の姿を目前に見出したとき、グラヒラはまるで埋れこんだもののやうに立ち竦んだ。そしてこの彼女の驚愕は突然キリーム・イワーノウキツチに、最後の手段を選ばしてしまつた。

『あーあーツ！』それは彼の絶叫でもなく、怒鳴つた聲でもなかつた。こうした頓狂な聲と共に彼はその太い胸體にも拘らず、一氣に扉口とグラヒラの中間に飛び込んでいつた。

彼女は餘りの驚きに度を失つて、逃げ出す暇もなかつた、ただ僅かに素手を前

方へ延して、後去りを初めただけだつた。何うとか辯解してこの場の危急から逃れようなどとは全然心には浮んでゐなかつた。夫の様子が餘りの兇猛なものであつたので、そうしたことの無駄であるとしてとつたのであつた。キリーム・イワノウキツチは彼の女の首筋を掴んで彼女の脊と後頭部とを、後の壁に強く叩きつけた、そして彼女はそれのときただ軽くその手に絶りついただけであつた。恐怖で大きく見開かれた彼女の黒い眼は、真面に、不動の儘に彼の顔をじつと覗めてゐた。

一切は沈黙に返つた。キリーム・イワノウキツチは、彼女が殆んど一步一步に素足を運ぶことの出来ないまで、手荒く彼女を壁際から部屋の中央に曳き出して床の上に投げ倒した。グラヒラは一旦手について體を支へたのだつたが、直ぐと又横に倒れた。襯衣は肩から脱げ、しかも襦袢は腰帶のあたりまで捲り上げられて爪で引掻かれた胸は露出し、顔一面に髪の毛の亂れがかつた、その殆んど裸體

に近い姿となつたグラヒラの形相は、丁度傷いた野獸のやうに物凄く見えた。キリーム・イワノウキツチは彼女を床に押し付けて擲ち始めたとき——頭と云はず、剃き出しの脊と云はず、胸と云はず、腹部と云はず或は拳で、又は膝で足で——彼女は、叫びもせず藻掻きもしないでただ少し唸つただけだつた。とき／＼彼は彼女の髪の毛を掴んで引廻して位置を代へ、再び押しつけて擲つのだつた。齒を喰ひしばつておし黙り、重い吐息を漏らしながら擲ちつづける彼が、その場合思い詰めたことは『たつた今、この場で彼女を殴り殺す』と云ふそのことであつた。

椅子は打倒れた。卓子は揺れてグラヒラに突き當つた。勘定書の紙は床の上に飛散して、置物は大きな音を立て、床の上に轉がり落ちた。廊下に眠つてゐた小娘はその物音に驚いて、何事も知らずに跳ね起きて来て見たが、慄え上つて、壁にびつたり、ひつ付いてしまつた。母親は、目を覺まして寢臺の上に座り、そし

て初めの程は、家の中に盗人が這入り込んだものと思ひ決めたので、危く救ひを叫ぼうとさへしたのだつたが、とぎれ／＼の罵るキリム・イワーノウキツチの聲と、そしてグラヒラの呻き聲、更に又素肌を擲つ音を耳にしたときに、母親は自らボンヤリと抱いてゐた疑惑の心が、電光のやうに頭の中を閃き走ると、直ぐに出来事をそれと見當がついた。そこで母親は手を打ち、無理やりにスカートに體を包むと廊下に駆け出でた。そのとき臺所では下女がそこに泊り込んでゐた御者と、二人の労働者を呼び覺ましてゐた。

母親はその部屋に駆け込むなり、先づ第一に打ち叩かれて黒髪が搔亂れてゐるグラヒラの頭と、體一面が痙攣的にビク／＼動いて剥き出しになつた裸足に視線を投げた。「殺すのだらうか？」と云ふ考が瞬間に浮んできた、そして嫁に對する凡ゆるこれまでの怨恨が復讐の毒々しい喜びとなつて、母親の心に起つた。

『この毒蛇阿魔には、いゝ氣味だ！ 畜生奴！』

ザーハルはグラヒラが出て行くの間もなく深い眠りに落ちてゐた。で隣室の騒音は大分過ぎてから聞きつけたのだつた。初めの中は何が何だか少しも解らないでゐた、が母親の叫び聲を耳にしたとき凡ての想像がついた。彼を捉えた恐怖と羞恥が、餘りに強烈であつた爲めに、最初の瞬間、身動きさえも出来なく、何處かへ雲隠れして、素知らぬ體を装ふか、と思つた程、彼の頭は混亂した、しかし彼がこうしたことを考へてゐるそのときグラヒラは遂に我慢し切れなくなつた。それは夫の殴打が彼女の口元に及んだとき唇は裂け、そして口の中に血液の味が感じられたとき、彼女は夫は自分を殺そうとしてゐることを悟つたからだつた。彼の女が耐へ切れなくなつて、鋭どく短く、悲鳴を上げたのは、このときであつた。

この悲鳴はザーハルの心に強く感動を與へた。自分が今正に撰ばんとする行動に就て顧る暇もなく、常軌を逸した彼は躍るやうに跳ね起きると、着てゐた寢衣

# 兄弟関係

一枚で廊下を駆け抜け、母親を突き退けて寢室に飛び入つて来た。掻き破られた顔に鮮血が流れ落ちてゐるグラヒラの裸體姿と、そうして同じような半裸體の恐ろしい表情をしたキリム・イワーノウキツチが彼女の上からのしかゝつてゐる光景を警視したザールは、異様な身振りをして駆け寄り、恰も猫のそのやうに兄に飛びかかつた。不意を喰つてキリム・イワーノウキツチはその機みに妻から手を離しどうつと床の上に臀部を打つて倒れた、が又直ぐに立ち上ると調子外れた妙な叫聲を立てて、ザールの胸ぐらを目掛けて飛びかゝつてきた。

『ああッ！ 貴様！ 貴様！ 貴様！』とそれは叫びでもなければ、吃るのでもなく、ただ眼を圓く大きく剥き出して奇妙な聲を出しただけであつた。

極度の狂憤は、恐るべき力強さを彼に與へた。ザールは彼よりも年若で、力も強かつたが、まるで小兒が弄ばるやうに彼の爲めに捏り倒された。そしてその時若しもグラヒラが彼の足に纏りつかなくなつたなら、ザールは彼のために絞め

殺される處であつたのかも知れなかつた。彼はザールにのしかからうとしたが彼女は床の上から彼の足を引提へて放さなかつた、で彼は、彼女が戀人の肩を持つてゐるものと思ひ、益々激しい憤怒に狂ひ立ち、彼女を眞向から蹴飛ばした。グラヒラは僅かに聲を上げたのみで其の儘氣絶してしまつた。

この時、頑強な腕をもつた大勢の御者や労働者達が、部屋の中に駆け入つて瞬く間に兄弟を両方に引離してしまつた。

『どうしたと云ふんです！ キリム・イワーノウキツチ、氣をしつかり頼みますせ！』と御者の一人は息を喘ましてこう叫んだ。

キリム・イワーノウキツチは、どうやら少しは落ちついて來たらしかつた。そして氣勢と狂憤とは、忽ち消え去ってしまった。彼は荒々しく椅子に體を落とすと袋のやうにうづくまつてしまつた。ぐつたりと両手を垂れ頭を前後左右に搖り苦しい太息をついた。そしてその朦朧とした眸差しは醉眼のそのやうでも病的



のものでもなかつた。彼が何事かを意識してゐたか？ それは疑はしいものだつた。

ザーハルはまだ兄に抵抗しようとしたが、傍の男達は彼を捉えて放さなかつた。そして骨ばつた肩に獅子毛の白髪を振り亂し、鬼婆のやうな面貌をした母親は、そのとき鈎のやうな曲つた指をザーハルの顔の近くに伸し、金切聲を振り絞つて罵り叫んだ。

『此奴叩つ殺してもあきたらないぞ——悪黨め——巫山戯やがつて、畜生！』

録でなし奴、この手で絞め殺してくれらあ！ 喰いついて噛み殺してやるぞ！』

女コツクは必死の聲で喚き廻つた。労働者達は競ふやうに叫んでゐたが、御者が母親を引き退けて云つた。

『お姆さん、お姆さん……本當にあんな神様の手前恥かしい事さあ！』

このときザーハルは、ふと床の上に長々と横に倒れてゐる裸體姿のグラヒラを

見て、彼女は全く兄の爲めに殺されて了つたものと思つた。で彼は激しく罵りながら狂ひ始めた、しかし男達が側から捉えてどうしても動かさなかつた。彼は一時の間、狂氣の様に抵抗して、遂に男達を突き退けて廊下に飛び出した。そして直ぐと自分の部屋に駆け入ると、壁に掛かつた銃を取はづした、狂亂の極にまで達した彼は、その場で兄を射殺しようとして引返して來た。

『あれーッ』と召使の小娘は、銃を見て叫びながら一氣に飛びついて來た。

ザーハルは發砲する隙がなかつた。と云ふのは母親が銃に取り縋り、御者がその道を遮ると他の一人の労働者が彼の脊後から兩手で彼を抱き占めた。皆はその部屋から彼を曳き出して彼の部屋に押し入れ、そして外部から戸に錠を下してしまつた。彼はやや暫くの間は拳骨や足で、戸を叩いて叫んだ。

『開けて呉れ……外へ出して呉れ……犬畜生を射ち殺すんだ。』

やがて彼の部屋の物音はぱつたり止んでしまつた。彼の様子を見に扉口の處に

忍び寄つた一人の労働者は、彼が素足で、荒々しく屋部を横切つて、寢臺の上にとつしりと身を投げかけた氣配を聞いたのだつた。

人々はグラヒラを抱き起して介抱した。女コツクは彼女の血を洗ひ落し、皆で彼女を正氣づけた。キリーム・イワーノウキツチを母親は自分の部屋に連れて行つた。

幼い小供の様に、彼は母親の言葉通りに従つた。そして母親の寢臺に座つたまま朝迄座り通した。頭を垂れ、床の上の同じ一點を睨めてゐたその眼は動かかなかつた。母親はそれでもまだ喚きながら、グラヒラが罪の發頭人だと云つて罵つたが、キリーム・イワーノウキツチは何時迄も沈黙を續けてゐた。

家の中はやつと静まりかけて、臺所で労働者達の囁く聲と、白痴のビョーテニカがひどく慄へ上つて、物置の中に體を隠して、母親が『しつツ！ 黙れと云ふに、この録でなし……。』と怒鳴るまで、彼は牝牛のやうに唸り續けてゐた。

## 八

朝になつて、ザールは自由に開放せられた。彼の顔色は蒼白く、そして彼は眼を伏したまゝ上げなかつた。

『ときにザール・イワーノウキツチ、貴方は農舎の方へお出でなすつた方がいいと、思ふんですが、實は……貴方の爲めに、馬の用意も出来てますんで……お母さんもそう云つてます、兎に角ここにお出でだと、亦どんなことになるか知れない、御覽なさい、まるつきり度を失つてるぢやありませんか。』

ザールは暫く考へてゐたが、結極御者の言葉に従ふことにした。實を云へば

彼としてもその儘止つてゐようなどとは思つてゐなかつたのだつた。彼は着物を着換へ臺所から庭へ出た、そこにはすでに馬の用意が出来てゐた。彼は車の中に座つたとき、鋭く視線を寢室の窓の方へ注いだ。門口に立つてゐた數人の者達は黙つて、意味ありそうな眼付きで彼を見送つた。

車の軌る音を聞いてキリーム・イワーノウキツチは、ザーハルが家から出發していつたことを推測した。

『出掛けたんだよ』と母親は云つた。

キリーム・イワーノウキツチは一ケ處を瞞め、沈黙をつづけた。

グラヒラは終日姿を見せなかつた。彼女は目ぶちの邊をひどく傷けられ上唇も腫れ上つてゐた、そうした變り果てた彼女の様子は、恰も、彼女が變挺な假面を被つてゐるかのやうに見えるのだつた。彼女は綯のやうに身を縮め、肩掛けで顔を匿して寢臺に横はつてゐた。體一杯に彼の女は痛みを覺えて、手と足は千切れ

るかと思はれるまでに痛んだ。彼女はザーハルのことも、そして亦自分の恐ろしい恥辱のことも、既に頭の中から失はれてゐた。全心を上げてただ夫と顔を合せらる——そのとき夫は自分を殺すかも知れない——その一つを思ひ煩ふのみであつた。

しかしキリーム・イワーノウキツチは、容易に妻の部屋へは這入つて來なかつた。たゞ母親が二度ばかりその部屋に立ち寄つたのみであつた、母親の覺音を聞きつけるとすぐに彼女は顔を覆つた、肩掛を一層硬く緊めて、恐怖と羞恥とで體の冷くなるのを覺えた。母親は残忍な憎惡の心で毒々しく彼女を見やりながら、しは嘔聲で、

『寢てゐなさるのか毒蛇奴！ うんそうよ、寢てる方がいいんだ！ 何だつてメツ／＼してゐなさるんだ！ 人に顔見られるが恥しいのかえ？ この穀潰しの横着奴が！ 叩き殺しても腹の虫が納らないんだ。』

母親の去つた後で、グラヒラを看病してゐた女コツクのアニーシャはいろ／＼と彼女を慰めるのであつた。

『何でもありませんよ、奥さん、誰の處にだつて罪や不幸はありますもの、人の噂も七十五日つて云ひますよ、叩かれても我慢してゐるさね……そうしてゐる中に亦好いこともありますよ！ どうして殺しなんかなさるものですか……何が何でも兎に角ご主人にとつては奥さんなんですもの……』

何時もの通りの時刻に、キリーム・イワーノウキツチは一見何事も變つたこともなかつたかの風に庭に出た。彼は一夜のうちに肉がげつそりと落ちこみ、一度に澤山の年を加へてしまつたやうに見えたのであつた。彼は常のやうに仕事を見廻つて歩いた。既に働こうとは思はれずと思はれた、男女の労働者達は急にどうやら卑屈と思はれる位までに、温和しくなつて、これ迄の様に、主人の顔を盗み見ることさへもなくなり、熱心に仕事に精勵するのであつた。主人の命令に對して

も驚く程の迅速さで成し遂げるのであつた。キリーム・イワーノウキツチは彼等が、しば／＼意味ありそうな素早い目付で自分を見るのを看知してはゐたが、素知らぬ風を装つて顔色にも出さないでゐた。

晝食は母と差し向ひで済したが、食欲は進まず酒さえも飲まないでしまつた。母親が再びグラヒラを罵り呪ひ始めると、キリーム・イワーノウキツチはやはり黙り込み、母親は全然自分に關係もないことを喋つてゐるやうな氣さえた。が女中の口から出たことだと云つて（實際は皆がよく噂してゐたことであるが）母親が、グラヒラはザーハルと久しい以前から關係してゐたんだ、と云ふことを聞かされたとき、初めてキリーム・イワーノウキツチは苦々しく顔を上げて頭を打ち振つたのだつた、何故と云ふに彼にはそのときまでのザーハルは彼の眼には尠くも何等變つたと思はれる特異な點も見えず、グラヒラにしても亦自分の妻として怪しまれるところがなかつたことを、今想ひ起したからであつた。

彼が何よりも苦痛の極みに耐えられないことは、自分のこの不名譽が今町中に知れ渡つたと云ふことである。そして又彼の氣にしたことは、弟との財産分配は免かれないものであり、しかもその爲めに全部の事業と云ふものが、それで失墜して愈々衰退して行くだらうと云ふことであつた。こうした考への二つともが等しくキリーム・イワーノウキツチに執つては、非常に苦痛なものであつた。が彼はこう云ふことを想像した。即ち自分の不名譽も臆ては忘れられて了ふであらうし、又ザーハルへの配當は出さずに済むことが出来る、と云ふのは、弟は仕事に對しては不熱心であり、概して充分盡さなかつたとの理由が設けられるからであつた。

妻のことに就いては、キリーム・イワーノウキツチは差して別に考へなかつた。彼はグラヒラを家から逐ひ出してしまふの、乃至は彼女と別居することなどは夢にも思はなかつた。それは彼等の社會としては許されないことであつた。グラ

ヒラは、彼にとつては法律上の妻であつて、如何なることがあつたとしても當然夫の許に残らねばならぬ筈であつた。神が結合させたことを、人間が勝手に離別するなど出来得ないことゝされてゐた。勿論、彼女は彼を侮辱した、そして彼女はザーハルに許したといふことを考へるとき、彼は心の苦痛を覚えねばならなかつた。けれ共彼は彼女に對して執るべき方法を堅く信じでゐた、その方法と云ふのは、手厳しく彼女を叱責することが最上の良策であり、それに依つて彼女の頭の中から一切の馬鹿氣た考へを、永久に叩き出して了ふに限ると思つてゐた。夕方、製油所に働いてゐる職工の一人が来て、吃りながら人足達が勘定を待つてゐると告げて來た。

『ザーハル・イワーノウキツチが監督しないから、わたしも困つてしまいますので……』

キリーム・イワーノウキツチは沈黙して一方を瞞めてゐたが、聽て帽子を被り

緩かに廣場を通つて出て行つてしまつた。労働者は帽子も被らず彼の後から駈けていつた。

母親はとうに夜の祈禱式に出掛けて、家の中は永久の空家のそのやらの静寂になつてゐた。このときグラヒラは起き上つて、頭から肩掛を被り、そつと玄關先まで出た。彼女は影のやうに體を運び、おびえながら、あたりに氣を配り、一寸した物音にも鋭く耳を聳てた。誰も自分を見てゐる者がないことを確めると、階段に立ち出で、夜の空を凝視めながら、深い思ひに沈んだ。

あたりには人影とてもなかつた。ブライヤン草の生ひ茂つた廣大な邸内は、墓場のやうに淋しく静まりかへつてゐた。ただ遠くの方、土藏の軒下のあたりに犬の鎖の鳴る音と鶏小屋で、クク／＼と鳴く鶏の聲が聞こへたばかりだつた。老木の柳はその長い枝を静かに揺り、そして町の屋根と、教會の上空のかなたに遠く、夕映の残光が目立たぬ位に、消えのこつてゐた。グラヒラは今、どんなことを心

に描いてゐるか、言明することは困難である。が、しかし、それは恐らく、斷片的思想表現であり、いづれも瞬間の中に起つては、消えていつたものであることが想像出来る。

——無情な、呪はれた戀にしろ、魂の有頂天にしろ、脱がれることの出来ない羞恥（不義）にしろ、乃至は過ぐる昨夜の出来ごとにしろ——すべては夢のやうに、いづれへともなく、蒼白の彼方に消えへて行つた。自分はこの先どうなることだらう？ と云ふことに就ては、考へてゐなかつた。彼女にはどうだつていゝ——ことだつた。勿論彼女としても自分が打たれ、苦しめられるであらうことは知つてゐたが、しかし、そのこととても既に鈍い疲れた憂愁以外、彼女に何等の刺戟も與えなかつた。

誰とも知れず庭内へ這入つてくるものがあつた。その足音を聞きつけたグラヒラは、身慄ひして、飛び上がらばかりだつた。がそれがビョーテニカであつた

ので、どうやら安心した。ビョーテニカは、或ひは、彼女に羞恥と恐怖を覚えさせない、たつた一人であるかも知れなかつた。彼女は彼が決して、打ちもしなければ、侮辱も、悪意も持つてゐないと云ふことを知つてゐた。

白痴は躊躇して立ち止り、そして遠方からグラヒラを見守つた。その眼眸は驚いてゐるのでなければ、同情を表はしてゐるものでもなかつた。彼のボンヤリした、小さい目にはどこか、人間的な表情が見られた。

グラヒラは蒼白の、悲しげな顔に笑を泛べて彼に對した。そこで白痴は元氣づき、呻き出して、殆んど聴き取ることの出来ない程の素迅さで、何か譯の解らないことを喋り、兩手を振り廻し、頭を揺ぶつた。

『お前どうしたと云ふの？ ビョーテニカ』無理に聲を出すと、負傷した顛顛のあたりが耐え切れない程痛むのであつたが、努めて馴れ／＼しく彼女はこう尋ねた。

白痴は彼女の側近く歩み寄り、片手を上げそして汚ない指で彼女の破れた唇を指差した。彼の眼は今、全く明らかに憐憫と忿激とを現はして來た。でグラヒラは自分のだらしない姿態が恥かしくなり、遽て肩掛けに身を包んだ。ビョーテニカは再び呻き出し、二歩ばかり後退りして、手で、鐵砲の狙をつけるやうな格恰をし『バツ——』と恰も鸚鵡かなぞのやうに、耳を張り裂く様な叫びを上げた。グラヒラは彼のその動作が、ザーハルがキリーム・イワーノウキツチを射殺さうとしてゐることを言ひ表はさうとしてゐるのだ、と解釋し、悸つとし、全身の冷くなるのを覺えた。今の今、彼女は漸く、如何に恐ろしい結果が家庭に持ち上つて來てゐるかをつきり知つた。そして、それによつて萬事は終ることを知つた。忽ち、恰も夢からさめたやうに、グラヒラはザーハルを想ひ出し、戀人の身を思ふ恐ろしさのあまり、心臓は血に漲るのを覺えた。

『ビョーテニカ！、ビョーテニカ！』白痴の手を捉へながら彼女は早口に『お

まへ、そんなこと……お頼みする——、そんなことがあつてなるものですか——  
本當に、お前——、そんなこと考へてはなりませんよ——、わたしザールさんの  
の爲めに、神様にお縋りし……手を合せてお祈りします——、からつて、そのこ  
とをザールさんに傳へておくれ。』

しかし白痴は頑固に、否定的に頭を振つて、またも同じ様な頓狂な叫び聲を上  
げた。

『バツ——。』

グラヒラはまだ何か言はうとした、がそのとき小門の開く聲がして、キリーム・  
イワーノウキツチの聲がしたのでハット身を起し、バネ仕掛けの様に戸の内に身  
を隠した。キリーム・イワーノウキツチはそのときは既に臺所に這入らうとして  
ゐた。グラヒラは鼠の様にひそやかに自分の部屋に這入り込み、大急ぎで寢床の  
中に飛び込んだ。そして頭から夜具を引き被り、呼吸を殺した。耳に聞こゆるも

のはたゞ、不規則に反響する心臓の鼓動だけであつた。

キリーム・イワーノウキツチは暗いそして決意ある顔をして家に戻つて來た。  
製油場にはいつもザールが出張つてゐたので、キリーム・イワーノウキツチは  
殆どそれに關係せず今日迄すこして來たのであつたが、しかし今といふ今こそは  
再び挽回することの出來ない程の損害の穴とも云ふべき幾多の不仕鱈のあること  
を見てとつた。

彼はにがい笑を浮べながら、

『未だまだどうして……、損害はこんなことぢやないんだ！』

このことはやがて妻に對する憎惡の念とかはり、彼は、彼女がその生涯に二度  
と再び忘れることのない様に彼女に思ひ知らせてくれやうと欲した。

彼には重つ苦しい殆んど盲目的の亢奮が刻一刻とつにつていつた。臺所を通り  
過ぎなみにキリーム・イワーノウキツチは馭者の置き忘れて行つた革鞭に目をとめ、



それを釘から取りはずし、戸口の廊下に放り出した。これを見た女コックは一言も發しなかつた。

キリーム・イワーノウキツチはムツツリとして食堂に這入り窓ぎわに腰掛けて晩食を待ちながら荒莫とした「セノーイ」の廣場の方に視線を投げてゐた。公園で奏されてゐる音楽が遠方からでは又一入うるはしくやさしく、響いてゐた、が、キリーム・イワーノウキツチはそれには何等の注意をも惹かれてはゐなかつた。彼は食事の濟んだ後妻に制裁を加へてやらうと腹をきめてゐた。そのことは僅かに彼の氣晴しになるやうであつた。

やがて母親が、蠟燭と、香の匂ひのまつはつた軀をして歸つて來た。廊下を通り過ぎなかに老婆はそこに放り投げられてある革鞭に直ぐ目を留めた、忽ち老婆の顔は何とも何へない強慾な、神経的な表情に變つた。だが老婆は一言も發しなかつた。

晩食は始まつた。キリーム・イワーノウキツチは、急がず、長いことかゝつて大食した。決心は既に出て來てゐることである、何にも遠てる必要はなかつた。今更グラヒラが何處かへ逃げ隠れする譯がないことを彼は知つてゐた。食事が濟んだ。彼は皿を押しやり、口邊を拭き、立ち上り、聖像に向つて十字を切つた。そこで妻の方へと出向いて行つた。だが革鞭のことは忘れてゐた。母親は素疾く自身で革鞭を取り上げて息子に追ひ付いた。キリーム・イワーノウキツチは革鞭に目を留め、うなづいてそれを手に取つた。母親は自制してはいなかつた。『あの恥知らず奴を、こつびどい目に合してやれ！ 目のさめる様に！』と母親は言つた。キリーム・イワーノウキツチは、それには返辭をせず、寢室に向つてドアを押して開けた。

母親は食堂に戻り晩食後の好みの砂糖の這入つた牛乳を小皿についだ。そして食卓の側に坐りながら事のなり行きをぢりぢり／＼しながら待つてゐた。例の險

しい表情は未だその聖像の様な顔から消え去つてはゐなかつた。その鋭敏な耳がどうやらビリ／＼動いた様にさへ思はれた。

女コックと小間使の娘とは臺處で食器を洗ひながらも、同様に何事か始まりかけてゐることに耳を聳てゐた。

『おばさん、わたし逃げるわ！ だつて怖いよ、おばさん！ 一思ひに殺してしまふのよ、きつと』小間使の娘は如何にもちつとしてゐるに堪へないといふ風に全身を慄はしながらせき込んだ。

『多分殺しやしないよ！』と女コックは、すゝまぬ氣ながら云ひ返した。

馭者が這入つて來た。

『打ちに出掛けて行つたよ！』と女コックは物々しげに馭者に告げた。

馭者は、何ものかを否認するものゝ様に頭を振つたが、何とも言はずに外套を取つて馬小屋に寝込むために出て行つた。

昨日は血なまぐさい、異状な事件があつたが、今日はすべて平常の通りであつた。

『こんな恐ろしい事件と云ふものは生きて二度と見る様なことはあるまい』と老馭者は獨り考へた。

寢室にはランプが燈つてゐた。グラヒラは前と同じ様に頭から肩掛を引被つて横たはつてゐた。彼女は夫が入口に現はれたことに、何にも氣付かない風に身動き一つしなかつたが、キリーム・イソーノウキツチが彼女を見据えたその瞬間グラヒラは突如肩掛を投げ棄てて跳ね起き、寢臺の側に突立つた。両手を垂れ、驚愕に満ちた大きな目をみはつてちつと夫を瞞めた。その目はその白い顔に殊更に黒々と見えた。

キリーム・イソーノウキツチはチラツと妻に投げた一瞥を横に向け、そして革鞭を卓の上に置いて、緩つくりと、急がず、脱衣を初めた。先づ上衣を脱いでき

ちんと釘に掛け、腕を自由にする爲めにチョッキの釦をはずし、身仕度が出来たところで左手に革鞭を携へ妻の側へ歩み寄つた。彼女は目ばたきもせず、真正面に夫を見据へた、彼女の顔は壁のやうに白かつた。「おい！」キリーム・イワーノウキツチは言葉を投げた。

グラヒラはブルツと身を慄はし、眼を伏せた。キリーム・イワーノウキツチは恰かも感極はまつたものゝ様に、やゝ暫らくの間彼の女を瞞めてゐたが、その眼は愈々大きくなり燃え上らんばかりに血走つて來た。グラヒラは殆んど生きてゐる心持がなかつた。彼の女の兩足はすくみ、手はワナ／＼顫えた。しばしは、物音も絶えた、と突然、皮もち切るかと思ふ様な猛烈な毆打をその頬に喰ひ、彼の女は殆んど足を上げて昏倒せむばかりだつた。グラヒラはよろめいたが立ち直つた。キリーム・イワーノウキツチは續けざまにその同じ頬の邊を撲り飛ばした。グラヒラは寢臺に縋り付いてゐたが、とう／＼支え切れなくなつて床の上に轉り

落ちてしまつた。そこでキリーム・イワーノウキツチは終始同じ様に急がず革鞭を左手から右手に持ちかへ、念入りにグラヒラの髪の毛を自分の拳に捲きつけ彼女を室の中央に引き曳り出した。グラヒラは逆らはず、爲さるるがまゝに素直に膝をつき、頸を長く延し、倒れない様に兩手をつつ張つてゐた。部屋の真中でキリーム・イワーノウキツチは、妻をその髪の毛を掴んで適當な工合に引廻し打ち始めた。

彼は大きく手を延して、彼女の背を、またはより苦痛を感じさせる場所を撰んで、或は縦に、或は横に、規則正しく、調子をつけて撲つた。一回打ち終るごとに、彼は髪の毛を掴んでは、妻を無理にも前と同じ状態に引き直した。グラヒラは逆らひもせず、悲鳴も立てず、たゞ身を慄はしたまでだつた。そして、苦痛に耐えかねて、痙攣的に足で床の上をもち／＼とこすつた。それは恰も、彼女自身がつ／＼と打つてきばきと打つてもらひたいと氣を揉んでも居るかの様に思はれ

た。

間もなく彼女の着物の釦はとれてしまつた。上衣は頸の邊にもつれ、むき出された柔かい肉付きのいゝ肩はもはや一面に白と赤の縞をつくつて腫れ上つた。所々赤い血の滴りが流れた。このときキリム・イワーノウキツチの激怒は正に頂點に達し、全身の血は逆上した。そして、彼女の肩と云はず、脊と云はず、足と云はず、所かまはず恐るべき速度をもつて亂打した。グラヒラは逃れやうとしたり或は空手で僅かに體を覆ふと繰掻いたりしたが、彼女の抵抗はたゞ、益々キリム・イワーノウキツチをいきり立てるに役立つたのみであつた。彼は狂憤に陥つた。そして最早何もわきまへず、思慮を失つてしまひ、たゞ調子にまかせて亂打するのみであつた。

その合間／＼に妻の髪の毛を掴んで引きづり、自分の撲るに都合のいゝ状態に戻す爲め膝頭で蹴つ飛ばした。やゝ暫しの間はたゞ彼の咽喉を絞つて出る吐息と、

風を切る鞭の打撃の音と、重々しいどさくさした物音が聞えるのみであつた。しかし、血が床の上に飛び散つたとき、グラヒラは終に飛び出し、鋭い金切聲を絞つて悲鳴を上げた。彼女は、狂亂したかのごとく藻掻き、起つき倒れつ、キリム・イワーノウキツチの手、足に縫り付き、革鞭を捉え、さては自分に對する虐主に接吻をさへ試みた。が、總ては無益に終つた。

彼女の悲鳴は、家中に、更に屋外にまでも傳つたのであるが、誰一人として拘はらうとするものはなかつた。彼等はこのことの在るのは當然のこととして考へてゐたのである。

終に悲鳴は粗暴な、連続した叫喚とかはり、突然歇んでしまつた。キリム・イワーノウキツチは妻の髪の毛を掴んでゐた手を放し、彼女の顔を膝頭で蹴飛ばした。打倒れたグラヒラは、體を廻し、俯伏となつた。斯くして一先は納つた。彼女の全身は慄え、そして足は痙攣的に縮まつた。

キリーム・イワーノウキツチは恰も火でも着けられたかの様に、荒々しい重苦しい呼吸をした。その顔は赤黒く、猛悪になつてゐた。妻の方には目をくれず、彼は洗面所の方に歩み寄り、手拭をとつて、顔や頸を洗ひ、栓に口をつけて、腹一杯水を飲んだ。初めてどうやら少しは落ち着いて來たらしかつた。そこで寢臺に腰を下し長靴を脱いだ。

グラヒラは依然として、横はつたまゝ顔を床に押しつけ、片手では頭をかゝへ他方の手は妙な工合に捻つて横の方に投げ出してゐた。その手の全體は僅かに動き、負傷した箇所は觸れやうとしてゐるらしかつたが、力なく垂れてしまつた。グラヒラは全身を慄はし噎ぶ様に啜泣いた。

キリーム・イワーノウキツチは長靴を脱ぎ、ズボンをとつて横たはつた。一時黙してゐた後に彼は言つた。

『いゝ氣味だ！ 少しや目も醒めたらう！ ランプを消せ、そこから愚圖付い

てゐるこたあないんだ！』

グラヒラ彼の言に應じなかつた。

『俺の言つて居ることが解らんのか？ 寝ろと云つたら寝ろ！』彼は躍起となつてこゝろ怒鳴りつけ體をもたげた。

グラヒラは吐息しながら床に兩手を突張つて體を起し立てたが、一旦力なく倒れた後、やつとのことによろめき、全身をワナ／＼慄はしながら立ち上つた。腫れ上つた彼女の顔は解け亂れた髪の毛が纏れかかり、汗に濕んでゐた。彼女は怪しげにぶら／＼と歩き出した。まるであたりの何もものも目は留らないかの様に。

『オイ、着物を脱ぐんだ』とキリーム・イワーノウキツチが命じた。

グラヒラは恐怖の顔を夫に向け、急いで着物を脱ぎ出し、慄える指で紐を結へた。キリーム・イワーノウキツチは流し目で彼女の動作に視線を注いでゐたが、彼の表情の中には慘忍なる、全く淫蕩の満足を語る何ものかゝあつた。彼女は着

物をすつかり脱ぎ終つて肌衣一枚になつたとき、さてどうしてよいか解らなくなつた。彼は毛布を捲り上げ體を突き出して言つた。

『ランプを消すんだ！』

グラヒラはランプのホヤの側に身を屈めた、が腫れ上つた唇が思ふやうにならない爲めに燈火はゆらめいて油煙を上げたゞけで、消えなかつた『オイ！何をぐづついてるんだ！』キリーム・イワーノウキツチは、彼女をどやしつけた。

グラヒラは殆んど絶望を、胸に懐きながら全力を盡してランプを吹いた。燈はとろ／＼と焰をのばして消えた。眞暗くなり石油の燃えざしの臭が鼻をついた。キリーム・イワーノウキツチは待つた。暫らくは音もなかつたがやがて、素足の和かい歩みの音が聞こへ暗闇の中に寢床を探しつゝある慄える手が彼の足に突き當つた。グラヒラは漸くのことに夫の體を越え、そして壁側の自分の場所に身を投げた。彼女の體は火の様に熱した。彼女は體を横たへ、息を殺した。

『オイ、なんでそんなに身を縮めてゐるんだ、馬鹿女！』それから暫く間をおいてキリーム・イワーノウキツチは云つた。『もつとこつちへ寄れ！』

グラヒラは怖々寄り添ひ、夫の荒くれた體に觸れ、夫の肩の邊に熱し乾いた吐息をつきながら、魂は消え去るばかりであつた。キリーム・イワーノウキツチは僅かに身を持ち上げ、妻の方に折り屈つた。

ザールは一人農舎に住つてゐた。

周囲は乾燥した塵埃多い荒野によつて繞られ、遠い地平線の彼方は燻つた様に茫莫としてゐた。農舎の邸内にあるみそぼらしい一かたまりの木立の外には、見渡す限り何一つ目に觸れる青いものはなかつた。そして灼熱の陽を受けて人參色になつた草の上空、紫色にかすんだ中を飢えた鷹が哀れな聲を出しながら圓を畫いてゐるのみだつた。ひどい旱魃つゞきで地面には割目が出来、夜毎に空一面は血の様な夕焼で物凄く顫えた。

ザールは煩悶と孤獨の淋しさの爲めに、體も瘦せ衰へて來た。

彼は家庭の方はどんな工合になつてゐるか全然知ることは出来なかつた。

町からは労働者も見えはしたが、彼は流石に氣恥しさを感じ、彼等に家庭の様子を尋ねる勇氣もなかつた。労働者達も、またそのことに就ては一言も口にせなかつた。で、彼としては尠くも、萬事は圓滿におさまつたものと推則した。彼は、最早、グラヒラは自分にとつては永久に失はれたものであると云ふことをよく知つて居り、そしてそのことは既に、斷念さえしてゐたのであつた。で若し、キリム・イワーノウキツチが實際に彼女を殺してさえくれれば、彼としては寧ろ氣が樂になることが出来たかも知れなかつた。が今彼等が仲直りをして、再び夫婦として暮してゐると云ふことを想像することは、彼にしては居ても、立つても堪えられない程の嫉妬の苦痛を覺えることであつた。それでも日中は仕事にかこつけて、どうにか、こうにか氣をまぎらかすことも出来たが、黄昏時や乃至は夜、

あたりが静まりかへつて來ると、彼は農舎の中に全くの孤獨となつて残され、どうしてよいものやら、殆んど爲すべきところを知らなかつた。彼が、ランプを消して寢やうとするや否や、彼の目の前の暗闇の中には、前にも増した、美しく、妖艶な、蠱惑的なグラヒラの姿が浮び出し、彼の全肉體は、彼女に對する慾求で緊張し、劣情の念が頭に込み上つてくるのであつた。

彼はときに、正體もなく酔ひつぶれて見たいと思ひ、あるときは修道院に這入り込まふと思ひ、またあるときは、いつそのこと、キリーム・イワーノウキツチを殺してしまひたいと思ふた。この最後の突飛な想像は熱した彼の腦裡に、休まることはなかつた。彼は夢の中に偶々、キリーム・イワーノウキツチの太つた腹、銃口、火と煙、そして最後には血を見た。不思議なことに、その際、いつも決して兄の顔を見たことはなかつた。しかし、そのことが、どう云ふものか特に彼には惱しかつた。またときとしては烈しい殺意が潮のやうに心に迫り、あと僅か一

歩の衝動によつて、事は決行されると思はれる程度にまで彼の心は熱したのであつた。彼がこうした恐ろしい悪夢に襲はれるのは多く夜半のことであつた。すると彼は跳ね起きて、あたふたと着物を着て戶外に飛び出し、朝になる迄農場の中を彷徨するのであつた。主人を見覚えてゐる犬共は尾を振りながら彼の後に従つた。一方の曠野の中は、そこは永久に晝のない夜のやうに思はれる程、黒々として、物凄かつた。

それから一週間を過ぎた、ある日年老いた馭者がやつて來て、ザーハルに其後家庭内に起つた一際のことを話した。彼は、老馭者の口から、キリーム・イワーノウキツチがグ、ラヒラに折檻を加へたとき、彼女の悲鳴は『恰も傷けられた豚の様だつた』と聞かされたとき、ザーハルは思はず毛髮の根本が動き、硬くこはばつた自分の顔を粘着く蜘蛛か何かで匍ひ上る様な氣がし、眼はくら／＼つとして眞暗くなるのを感じた。



しかし、なほ馭者の口から、彼等も現在は仲直りをして、ことなく暮してゐると聞いたとき、ザーハルは、たゞにキリーム・イワーノウキツチのみならず、グラヒラまでも共に殺してしまひたいと思つた。

『知れ切つた事だ！ 何と云つたつて、女は女だ。女と云ふ奴あ！ 少し手痛いことさえ見せりあ！ 直き我を折つてしまふと云ふ譯で、弱いものなんだ！ どの女だつて皆んなそんなものだ！』こう言つた馭者の言はザーハルには眞當の言の様に思はれ、矢張りグラヒラにとつては實は彼自身であらうと夫であらうと——同じことであるんだ、と考へられた。

老馭者の物語りは殆んど堪え得ないまでに彼を苦しめた。彼の心中は燃え立ち切りきざまれ、焼きつけられる思ひであつた、が、それでも彼はなほ、馭者の話しがもつとく、際限もなく續けられてくれ、ばい、と心に願つた。彼はたゞグラヒラのことのみが問題であつたが、それでも禮儀上母親のことなど、尋ねない譯

にもゆかなかつた。

『ときにおつかさんは、どんな風かね？』

馭者はきつとなつて、

『そのお姆さんなんですがね……全くそれあ！ 苦り切つて居りますよ。まあ！ 考へてもごらんない、あんまり世間へ顔出しも出来ませんよ！ 近頃ぢあ、世間でもあの人達をよくは云はねえでございます。お姆さんは、以前からあなたにあ、つらく當つてますがね……まあ、後になりあ、なんでもなくなりませう……兎に角、何と云つたつて自分の息子さあね、生みの親の心つて云ふものは、亦格別なんですからな。ときにザーハル・イワーノウキツチ！ あなたを思つて泣いてゐる人間がありますよ！——突然馭者は笑ひ出し——ビョーテニカさ！ 此頃どうやら少し瘦せて来たがね！ 本當なんで！「ムウ、ムウ」——馭者は口眞似をしてみせ——とね、それあ！ あんたに一生懸命なんです。こんなこと

つて云ふなあ、まあ、滅多にないことですよ！ 馬鹿が人並に慕ふなんて……」  
馭者は七杯目の茶を飲み干し、コップを倒にして、その底の方に嚼り残しの砂糖屑をのせ、立ち上りながら、

『澤山と、御馳走になりました、ちやーお休みなさい。』と別れを告げた。

ザーハルはもつと彼を引き留めて置きたかつたのだが、躊躇してゐた。

馭者は天井下の隅に掛けてある聖像に向つて十字を切り、彼に向つて今一度頭を下げ出て行かうとしたが、戸口のところで立ち留り、

『だが、お淋しいことでごんせう！ こんな處で……一人ぼっちで……わしあ！ あんたに鐵砲を持つて来てお上げしりあよかたんで、そう思ふことは思つたんですが……では孰れまた……』

馭者はとう／＼出て行つてしまつた。そこでザーハルも外に出た。そして帽子も被らず、彼は悄々と暗い曠野に向つて歩いて行つた。

『人殺し！ 人殺し！ 人殺し！』それは彼の腦天を槌でどやしつける思ひであつた。

翌朝になつて彼は漸く、疲れはて、埃だらけの姿となつて家に戻つて來た。彼の眼はどんよりとし、顔は死人のやうに青ざめてゐた。牛の乳を搾りに來た女が彼の姿に目を留めて、

『まあ、ザーハル・イワーノウキツチさん、あんた、お休みにならなかつた様ですわね！ おからだの爲めによくないことですよ！』

ザーハルは一言をも返せず、たゞ何かに喫驚りさせられたかのやうに、妙に顔を横に背けた。彼は一目でそれを感じられる程、氣をとり亂してゐた。働き女は彼の通り過ぎた後を見送り頭を振り、『あの人は餘程、どうかしてゐる』と一人考へた。

しかもその前夜、次の様な事件が突發したのであつた。——グラヒラは既に枕に

就いてゐたが、キリーム・イワーノウキツチは襦衣の上に汚ないズボン吊をして  
邸園に面した窓を締めてゐた。その夜はとても我慢の出来ない程の暑苦しきであ  
つたが、チーキイの家庭では、昔からの家風として、盗難の恐れがあると云ふ理  
由から、窓を開け放したまゝ寝るなど、云ふことは許されてないことであつた。  
屋外は眞の闇に包まれ、空を背景に立ち上つた屋根や樹木の形さえもが殆んど  
見分けがつかない程であつた。澤山の星は見えてはゐたが、しかしそれは、輝き  
のない、鈍い光であつた。窓に接近した部分の木の葉は、窓から漏れるあかりを  
受けて、暗闇の中に神秘的な緑の色を照り返してゐた。家から數歩の距離のここ  
ろに立てられた庭柱が朦朧と白く見えた。紫色の電光が閃く、と、その瞬間、空  
はバツト明るくなり、立樹は物凄い黒い影を見せた、が、次の瞬間萬象は再び暗黒  
の闇の中に姿を消すのであつた。

『夕立がやつて来るわい！』とキリーム・イワーノウキツチは一人呟いた。

三才が  
スリ教

しかも丁度この瞬間である。耳をつん裂く様な爆音が大氣を破つて窓硝子を震  
動した。発砲の閃光とともに、草叢に取り囲まれてゐる一ばん近くの木立の中に  
銃身が閃き、そして白い庭柱の一方を過ぎる誰かの影が見えた。

キリーム・イワーノウキツチは、誰かゝ恐ろしい力を持つて自分の胸を突き、  
ある熱い息が顔に煽りつけられたかのやうな氣持ちがした。銃聲は既に彼の耳に  
は這入らなかつた。意識を失つた彼は、二歩ばかり後退りしたかと思ふと、どつ  
さりと床の上に打ち倒れ、両手を伸ばして、自分の上衣の掛けてある椅子を引き  
倒した。

彼は倒れんとする瞬間、絶望的に『ザ……』と叫んだ。

忽ちにして彼の顔は平和な、無感覺な表情と變つた。そして彼は二度ばかり全  
身を捻り、太つた腹を下にして軀を持ち上げたかと思ふと、それきり動かなくな  
つてしまつた。その左肩に片寄つた邊の、引き裂かれた更紗のシャツを泌み通し

て黒血が流れた。

餘りの出来ごとに膽を潰したグラヒラは、寢床から跳ね起き、戸口に駆け寄り、聲をかぎりに全切聲をはり上げた。彼女の叫び聲を耳にするを合圖に、家中のものは一聲に起きて、物々しい聲をたてながら駆けつけた。犬は吠え出した。

十

デーキイ家に傳はるドラマは、既に久しい以前から全町中の話題の種になつてゐたが、今、更にまた、キリム・イワノウキツチの變死したことの事實を加へて、彼等の興味は愈々その絶頂にまでそゝり上げられた。

が併し、この殺人事件には、何等の訝疑の餘地はなかつた。輿論は期せずしてザールが當の下手人であることに一致確定した。

その翌日、ザールは拘引され、收監された。

あらゆる證據が提示された。即ちザールの所持する二連銃（それには發火し

て空になつたケースが箆つてをり、銃口にはまだ新らしい火薬の汚れがついてゐた。が窓から數歩の草叢の中で發見された。そして勞働者共は異口同音に、ザーハルが、例の兄弟喧嘩の際、キリーム・イワーノウキツチを射たうとしたこと、並にそのとき居合せた一同のものが總がかりで彼から鐵砲を取り上げたとき、彼はきつと射ち殺して見せると云つていきり立ち、「犬畜生を射ち殺してやるんだ」と威嚇したと云ふことを證言した。

女中は農舎から、ザーハルはその當夜は徹宵家を留守にして、どこか餘程遠方に行つて來た様子で、朝になつて漸く戻つて來たが、彼はすつかり泥まみれになつてをり、その上疲勞し切つて見え、いちどるしく「心を取り亂してゐた」と云ふことを訴えて出た。

「あの人は、いつもわたしには何となく警戒をしてゐらつしやいますので、あの時はわたしには何一言もおつしやいませんでした。わたし、そのとき一目であ

の人が兄さんを殺したに違いないと云ふことを見てとりました」と、この元氣のいい別嬪さんはべら／＼と喋つた。

最後に、老馭者は不本意ながらも、その當日の夕刻、ザーハルが兄のこと、及びグラヒラのこと、に就て色々と彼に尋ねた云ふこと、そしてそのときザーハルはまるで顔色を失つてゐたと云ふことを白狀して、次のやうなことを、付け加へて言つた。

「わしやあ！　もう以前からあの人にそう言つてゐたんです。『ザーハル、ワヌイチ（イワーノウキツチのこと）お前さんあんな女にや唾でも吐きかけておやんなせさい！　廣いこの娑婆にやあ！　女なんかいくらでも居りまさあ！　どの女だつて、女は女なんで……と、わしやあ、言ふて置きました……だが、なか／＼口で云ふ様にあ！　行かねえと見えて……あの人もあの女の爲めにあ心を奪はれて居りやした。大體のこの起りと云ふのがそこから出てゐるんで……毒蛇

の畜生め！ 男一匹をだいなしにしやあがつた！」

審査の項目中でも特に重要なものとして數へられてゐる一つが問題となつた。それはキリーム・イワーノウキツチが死に先だつて發した「叫び」の問題に就てゐあつた。

彼の叫び聲、もつと正確に言ひ表すなれば、彼の絶望の悲鳴は家中に響き渡り、多數のものがそれを耳にしたのである。そのときは母親は未だ寢床に就いては居らず、女コツクは食堂で片付け仕事をして居り、労働者は臺所で晚食中であり、小間使の小娘は廊下に夜具をのべてゐたし、そして門の隱のベンチには、他の娘の一人が意中の軍人と腰掛けてゐたのであつた。彼等は皆、キリーム・イワーノウキツチが明確に「ザーハル」と叫んだと云ふことを確信的に主張した。

しかるに、こゝに本事件に對しては一ばんの直接證人であるところのグラヒラ（彼女は其後あらゆる虐待を受けてひどく衰弱した）だけが、彼等に對して反對

の證言を主張した。即ち彼女の言ふところによると、キリーム・イワーノウキツチは單に「ザー！……」と叫んだのみであつたと云ふことであつた。なほ彼女の意見に據ると、被害者の言はふとしたことは「ザ、チトウ（どうした譯なんだ？）」とのことであつた。

だが、こうした推測は、第三者から見れば、それは勿論グラヒラが自分の戀人を辯護せやうとして編み出した、甚だこぢつけない説明であり、全然根據のないものとしか受けとれなかつた。彼女が夫を愛してゐなかつたことは衆知の事實であり、殊に彼女の姦通したことが發覺して以來と云ふもの、キリーム・イワーノウキツチは、何度となく彼女を打つたら、折檻したりした。そしてその上に彼女に對して無理にも妻たるものゝ務を果すことを強いたのであつた。しかるに彼女がザーハルに對する態度はとみると、彼が農舎から拘引されたその日の中にも彼女は彼の獄舎に走つた程であつた。

さて當のザーハルはと見ると、彼は、人目にそれと氣づかれる程、いちぢるしく心の動搖を來たしてをり、『私は兄を殺しません』と、たゞその一言を繰返すのみであつた。

彼の所持の鐵砲が兇行の場所に發見されたのはどう云ふ譯であるか？ との審問に對し、彼はそれはどう云ふ譯か知らないと答へ、そして、

『私は鐵砲は家に置き忘れたんです……私の手許には鐵砲はなかつたのです』と云つた。これは、後になつて、馭者のマツエイが、記憶から想ひ出したことではあるが、彼の記憶によると、鐵砲は被告の言ふ通り、それは實際家に置き忘れて行つたものであり、ザーハルが非常に狩獵が好きであることを知つてゐた彼は、ザーハルが、野原の一軒家で一人淋しがつてゐることを想像して、自分が農舎へ出掛ける際、鐵砲も一緒に持つて行つてやらうかと思つた、とのことだつた。しかし氣の毒なことこの肝腎な事情も、その場では彼の頭に浮んではこなか

つた。そして、ザーハルに對する彼の同情がいよく、切になつて來た結果、漸く氣付いた頃は審問も既に終つた後になつてからのことなので、切角の彼の證言も特別の効果を納めることは出來なかつた。

最も重要な問題——彼が罪に問はれんとしつゝあるその運命の當夜、彼がいつれに行つてゐたか——に對して彼の答へるところは僅かに、次の如くであつた。

『原の中を歩いてゐました』

『夜通し歩いてゐたと云ふのですか』と豫審判事は問ふた。

『夜通しです』とザーハルは外見いかにも確信のないものゝ様に繰り返した。

『どう云ふ目的で、あなたはそんなに夜通し歩き廻つてゐたのです？』

『目的はなかつたのです……たゞ歩き廻つただけなのです……私は非常に氣分が面白くなかつたのです。』

誰にでもそれと氣付かれるやうに、ザーハルの答辯は多くの場合に於て、彼が

自分自身を辯解するのを望んででもゐないかの様であつた。しかし彼は、自分が兄殺しの眞の下手人であるとされたとき、始めて奮然として、心からの恐怖と嫌悪とを懷いて辯明に努めた。より正確に言ひ表すならば、彼は假令如何なる事實が存在しやうとも、彼は、兄殺しの下手人と云ふやうなそんな恐ろしい罪を被せられることに對しては、斷じて我慢が出来ないかのやうであり、しかしそれと同時に、彼は、彼自身の運命に對しては徹底的に冷淡であるかのやうに見えた。

事件参考人中の大部分のものゝ、この事件に對する態度には豫審判事も多少意外に思はせられた。彼等は各自問はれるまゝに、誠實に申し立てをした、が、どう云ふ譯か、彼等の誰も彼れもが自分の意見と云ふものを口外することを何となく恐れてゐるかのやうであつた。そしてその點に至つては、グラヒラや母親でさへもがその通りで、特に目立つて被告を辯じてゐる様子も見えなかつた。

その點は誰にも理解されやう筈もなく、それは後になつて検事はその論告中に

指摘したところであつた。

こゝに特に奇體なことは母親の態度であつた。事件の起つた最初の瞬間には彼女は狂亂したかのやうに息子の死骸に飛びついて、しかも人々の大勢集つて居る中で、大聲に、犯人は確かにザーハルであつて、他に誰の仕業でもないと呼んだのであつた。そのことはその場に居合せた全部の人達によく知つてゐることであつた。しかるに彼女は豫審判事の審問中、突然、がらりと態度を變へ、途中で黙り込んでしまひ、最後には、一人の母としての眞情を披瀝して答辯をさえ全然拒んでしまつた。

しかしこのことは後になつて、検事はその論告に利用するところとなつたのである。

要するにザーハルが殺したと云ふことに對しては、それが事實であるとして既に何人も疑ふものはなかつたのである。が、實のところこの殺人事件に對する一



般公衆の興味も、それが、グラヒラとザールハルの關係事件に比べると、さ程のものでもなかつた。

一般公衆の注目したことは次の様な事情であつた。即ちザールハルとグラヒラの各々にとつては兄であり、夫であるところのその人の血を二人の間に流した今後、彼等がなほ同棲するであらうか、それとも永久に離別するものであるか？ と云ふことに就てゝあつた。婦人連は、彼等は屹度同棲する様になるであらうと主張し、男の側はその説を信じなかつた。婦人連の言ふ根據は、ザールハルが彼女の夫を殺したのは彼の熱烈な愛情の結果であると云ふのであるが、男子側はそれに答へて『オー、あなた方は未だあの社會の人間と云ふものをご存じないんです。彼等にとつてはそれは、實に許すべからざる罪惡なんです。あの男の亡きものとなつた今、彼等に殘されたたつた一つの途は修道院だけなんだ。孰れにしても今後彼等が故人の寢臺を占領する様なことはありませんまいよ』

ところが程なく一般の驚異に値することが知れ渡つた。と云ふのは、グラヒラが毎日獄舎を訪れるにもかゝはらず、ザールハルが頑として彼女との面會を拒絶しつゝあるといふことであつた。

『そーら、どうだね、彼は彼女を見るさへいやだと云つてゐるぢやないかね！』と一方が誇らしげに言へば、

『ですけれども彼女は、相變らず足を運んでるぢやありませんか！』と他方側で反駁した。

『ときに彼女も、そうした女の一人なんだ、戀を懷いた女と云ふものは、どんな罪にだつて驚くものぢやないんだ。』

實際彼等の言ふ様にグラヒラは、毎日かゝさず獄舎に通つた。色青ざめて、黒衣に身をつゝんだ美しくい彼女は、遇ふ人ごとに目を伏せて通り過ぎた。彼女の手の中には牢の中の人に贈る爲めの、布で包んだ小さい包みものがいつも持た

れてゐた。彼女は獄舎の門外に根氣よく待ちつゞけた。そして最後にザーハルは面會を欲してはゐないと告げられたとき、彼女の顔は更に々々青ざめ、目を伏せたまゝ、その持つて來た包みを監視人に預けて黙つて出て行くのであつた。しかし後にはそうした贈物も再び彼女は自分の手で持ち歸るか、さもなければそれは、そのまゝ乞食にでもやつてしまふに過ぎなくなつた。ザーハルは突然そうした差入物さへも拒む様になつて來たのである。

デーキイ家の家族としては、女二人と白痴のビョーテニカが残されたのみであつた。

話の次手にこの白痴のことに就ても、多少説明を加へて置かうと思ふ。ビョーテニカは殺人事件の激動を受けた結果、どうやら多少聰明になつて來たかと思はれる様などころがあつた。尠くとも彼の目の中にはある表情が認められる様になり、その態度も落ち着き、まるで思慮のある人間らしくさえなつて來た。

キリーム・イワーノウキツチが殺されたとき、白痴は殆んど仰天してしまつたものと見え、家を飛び出して土藏の裏手の草叢の中に身を隠した。そして三日目の夕方に漸く彼をその場所に發見したとき、彼はすつかり飢え切つてをり、そして土塗れになつた彼の様子は、さながらの野獸であつた。彼はどうなだめても、いつかな、その隠場所を離れやうとしなかつた。皆のものが彼をその場所から無理にも曳き摺り出さうとしたとき、彼は狂亂して暴れ叫んだ。最後に一つの詭計を弄して漸くのこと、彼をその場所からおびき出した。その手段として、五十錢玉一つをやると云ふ約束で、顔立ちのいゝ日傭娘の一人をその場所に派遣したのであつた。

兄の葬式中坊さんが來て、香を焼き、そして家の中に鼻聲のとり亂れた讚美歌が響いたとき、ビョーテニカは家を抜け出し再び姿を隠してしまつた。

『どうです皆さん！ 呆れたことぢやありませんか、馬鹿でも矢張り死は怖いも

のと思はれますね」と老助祭は白痴の身を隠した原因に就いてこう説明を加えた。キリーム・イワーノウキツチはクラドピシチエンスク街を通つて墓所に運ばれて行つた。またも弔の鐘が鳴り渡つた。曾つて彼が新妻を伴つて町に向つて、通つて来たその日と同じ様に。

そのときの新妻は今彼を葬つて、家庭内の唯一の女主人となつたのである。それにつけて一般にとつて不審でならないことは、当初から嫁を嫌つてゐたが、彼女が夫を裏切つてからと云ふものは彼女に對して烈しい憎惡を向け、絶えず息子を唆かして彼女を拷問せしめた……その母親がキリーム・イワーノウキツチの死後突然態度を一變して彼女と仲直りをし、仕事の一切をさえ彼女の手に引き渡してしまつたのである。

一方グウヒラにしてもまた、年老いた姑に對して生みの母親に對するやうに萬事尊敬と愛情とを示したのであり、そうした彼女等の關係はやがて眞の愛情に基

いたものにまでなつて来た。彼女等は偶々一緒に教會に行き、そして二人とも儀式の終るまで悼まし氣な、嚴かな青ざめた顔を並べてイみつゞけた。次手ながら附言して置くが、あの若く、美しいグラヒラの顔にこのとき以來、どうやら母親のそれのやうな聖像畫的の俤が浮んで来たとのことであつた。

一方の息子を墓場に送り、他方の息子を獄舎に奪はれてからと云ふもの母親は一度に年老いて、すつかり氣を落してしまつた。仕事から全然身を退けた母親はたゞ教會詣りと追善供養と、貧乏人に施しするのがせめてもの氣慰であつた。そして彼女は家に居る間はたゞ自分の部屋に坐りつゞけ、食事もそこですますのであつた。家政のことから、製油場及び農場のことに涉つてグラヒラは自身萬端切りまはしをつけていつた。而かも驚くことに彼女はそれ等の悉くに對して、優れる實際的の才幹と、強固なる意志とを持つて臨み、立派に女主人としての働きを示した。

最初の程は全體の人達が彼女を指して「殺人女」だの「姦婦」だのと云つて誰も彼女の命になど應じるものはなかつた。労働者はすこしも働かうとはせず、娘共は巫山戯、女コックは脹れ面をして、勘定ばかりせがむ様な始末で、家中はさながら無政府状態であつた。しかるに次の週の終る頃には、グラヒラは既にどうにかこうにか努力して全部のものを手中に收攬することに成功し、彼等をして黙つて彼女の命に従はせるやうにした。そしてやがては彼等は彼女を尊敬する様にさえなつた『男優りの女ですよ！ 勿論あゝしたこともあつたさ、しかしそれあ！ 胡蝶の犯した罪と云ふもんだ、何と云つたつて悪魔にやあ、勝たれんからね……だが一體罪のないどんな人間があんだ？ みんな同じ人間ぢやないかね！ なんのかんのと云ふけれど、結極のところ若しあの女が今日居らなかつたら、それこそあの一家も今頃は滅茶苦茶さ。それに十萬圓からの財産が積んであると云ふにさ』とは、彼女に就て市場の人達の口にするところであつた。

ヂーキイ家の不幸を耳にしたグラヒラの父親は、別に力になつてやらうと云ふ目的でもなければ、と云つて、甘い汁にありつかうと云ふ譯でもなく、ぶらつとやつて来た。彼は近時完全のアルコール中毒者となり、獨身者となり、そして方々の市場で喧嘩をふつかけたり、泥坊だと云つて百姓達から、こつびどく撲りつけられたりすることがしばしばであつた。グラヒラは町噂に彼を迎えはしたが仕事のことには就ては斷じて彼に容喙を許さなかつた。

『いーえ、いゝんですから、おとつあん引込んでゐて丁戴！ わたし自分でやるんですから、一際を身に引受けて、そして主婦として立つて行かねばなりません。みんな私の責任なんですから。』

老人は立腹して、行つてしまつた。

公判の日が愈々切迫してきたので、グラヒラは、縣廳所在地の市にと出掛け、ザーハルの爲めに莫大な金を投じて、最も名望ある辯護士を招聘した。このこと

は勿論母親とも相談の上のことであつた。が、町内では、こうした彼女の行爲を非難して、次の様な噂を立てるものさえあつた。

『婆さんもどうやら老録したが、それにしても素てつこいのはあの女だ。全部の財産を自分の手に掻き集めやあがつて……今に見てゐるが、ザールでも出獄すりや！ それこそ二人で全部の財産を根こそぎかつさらつて仕舞うんだから』  
こゝに奇體なことは、町中全部の人々が、ザールの罪業を信じて疑はないのに市場の仲間のもの丈けは、反對にザールの無罪を固く信じてゐたのである。

この地方の有識者連中は、彼等のこの矛盾的な見地をどうしても了解することは出来なかつたが、一方老いた淳朴な商人達は、自分達の考察を正しいものとして譲らなかつた。それは彼等が恰もある何等かの真相をつかんででもゐるかの様に沈黙を持って、人からその理由を尋ねられる様な場合にも、たゞ僅かに『孰れ後になれば解ることだ』と答へるのみであつた。

ケル

十一

ザールの公判は大齋期の當日開廷されることになつた。適々雪の解けかゝつた折柄で、畑地は大きな透明な水溜りで蔽はれ、夜になると烈しい濕氣を含んだ風が吹いた。町に於ては終日懺悔と、告白の式を告げる鐘が鳴りつゞけた。

裁判の開廷された場所は地方自治會館の大廣間で、そこには厚く出つ張つた金枠に納めて掲げられた皇帝の肖像と、金の房のある赤い羅紗で覆はれた長いテーブルが控えられてあつた。

公判を傍聴しやうと、集つて來た群集の數は大したものであつた。郡下の婦人

と云ふ婦人は悉く、性慾と戀愛、嫉妬と叛逆とに基いた、この興味ある裁判を傍聴しやうとして押しかけて來た。しかし彼女等にとつて主なる目的は、噂の主人公を見ると云ふことであつた。一般にザーハルは好男子の上に、グラヒラは絶世の美人であるとの評判であつたからである。

場内は全く人で充満し、婦人連のおめかしと、將校連の軍服、役人連のフロックで雜然たる色彩を放つてゐた。後方の列には商人側の連中がきちんと座を占めてゐた。しかし一般の百姓の姿は一人も見えなかつたが、それは場所の関係で、總ての希望者を悉く容れる丈けの席がないので、傍聴券の所持者に限り入場を許したのであつたが、しかしそこには多くの奸策や、侮辱や、爭論、乃至は苦々しい不公平な處罰等を包含した、珍妙な現豫のあつたことは云ふ迄もないことである。

場内は恐ろしいどよめきに満ち、轟音が絶え間なく續いた。無罪主張派と有罪

主張派とが互に譲らず、殆んど裁判の開廷される間ぎは迄も火の様になつて口論し合つた。その爲め大切な「裁判を開廷します」と云ふ言さえ全部のものが聴きとることが出来なかつた程である。で、裁判官連は、逆浪の様な騒ぎが徐々に靜まるのを待つて、それ／＼の席に着いたのであつた。しかし、やがて總ては落ち着き場内は水をうつた様に靜肅さになつた。

『被告の着席！』が告げられた。

氣の毒なことに、傍聴人は開廷の最初の一步に於て興味を中心をそがれた、と云のは他でもなく、グラヒラの出廷がなかつた上に、一方ザーハルは商人階級の目にこそさまで見苦しくはなかつたと云ふものゝ、しかし獄舎に居た間に彼は傷ましい程衰弱して、皮膚の色艶は失せ、髯は生えのびてゐたのであつた。そして全體の審問に對しても彼は眼を伏せたまゝ、恰も氣抜けしたものの様に曖昧に、物憂げに答えるのであつた。

婦人連の間には既に我儘な不平のどよめきが傳つた。そして終には全體のものゝ注意が遠來の辯護士の方へ集中される様になつた。

その辯護士と云ふのは縣下に聞えた名望家であつて、こうした知名の士が曾つてこの町に訪れたことはなく、恐らく開關以來のことゝ想像せねばなるまい。

辯護士はやゝ白くなりかけた髻と、秀美な、そして聰明な眼を持つた、典型的の紳士であつた。彼にはある妙な癖がある風に思はれた。彼は恰も、絶えず敏速にあらゆる周圍のものを嗅ぎつけるもののやうに、ときどき鼻を動めかした。そのもの言ふ語調の中には非常なる自信が籠つてをり、打ち解けてさえゐた。そして、その聲はいかにも氣持ちよかつた。

裁判の最初の場面——犯行の經過、證人の誓言、及び審問——は紋切的のものと興味はなかつた。證人と云ふのは、いづれも低級な人物であり、その申し立てるところも一般に判り切つたこと以外ではなかつた。

先づ大體に於て告訴と、證人の訊問によつて示されたこの場の光景に於ては、無罪派側がやゝもすれば赤面をすると云ふ形成であつた。こゝまでは總ては寔に平凡な判り切つたことであり、ザールが兄を殺したと云ふことも、豫審手續が豫定の結果通りの紋切形の正式な順序に變つたまでのことで、いづれも豫期された明かなことに過ぎなかつた。

傍聽人は今にも兩派の大激論が始ることを豫期して多少活氣付いて來たが、より一層彼等の興味を煽つたのは、今に摺み合ひでも始まるかも知れないと云ふことであつた。即ち云ふ迄もなく彼等は有名な辯護士の辯論を期待したのであつたが、彼等の期待を裏切つて、それよりも檢事の論告が遙かに見ものであるかの様に思はれた。

また實際に遠來の辯護士は、證人に對する訊問に於て特別の技倆を發揮しなかつた。即ち彼はごく月並な筆法を辿り、皮肉的な論法に據て證人達の證言の確實

性を顛覆させやうと努めたのであつた。

一例を上げてみるなれば、出しやばりで口達者の農舎附の女コックに對する彼の訊問は次の様であつた。

『……なる程、では證人としてのあなたのおつしやるところに據りますと、あなたは、そのとき被告を一目見て直ぐに、彼が兄を殺したと云ふことを見てとつた、と、こうおつしやるんですね!』

『そうなんです、私一目でそうと見てとりました』

『では被告の顔に何か人殺しをしたと云ふ「特別な表情」があつたと云ふ譯なんですか?』

『それあ! 勿論のことです』と女は平然と答へた

『あなたは骨相術には餘程の大家であらうおつしやるんですね!』と辯護士はさも感心顔を見せ『では兎も角も私共の爲めに一つあなたの御説明を願ひたいんです

が? 一體兄を殺したと云ふ人はどんな顔付をしてゐるものなんでせう?』

女は答辯に困つて黙つてゐた。

『えーと、只今あなたは被告はいつも、あなたに對しては特別に何か用心深くしてゐたとかおつしやつた様でしたが……その特別な用心深い表情の中には、特にどう云ふことが暗示されてゐたでせうか?』

女はちらと辯護士を眺め、次に傍聽席の方を横目で見て、顔を赧めた。傍聽席にはかすかに笑聲が聞えた。

『あなたのおつしやる處によると、被告はそのとき通常とは違つて、殊更にあなたに親切さを示さなかつたとのことなんですが……』と辯護士は弄ぶ様な調子で更につゞけた。『だがあなたは特別な何を彼に對してお求めになつたんです? 彼があなたを掴つてくれればいと、そんなことぢやあなかつたんですか?』



傍聴席の間にはクス／＼笑ふ聲が聞えた。

辯護士は萬事こうした筆法で、終始訊問を繼續して來たのであるが、鐵砲の問題になつて來たとき始めて慎重な態度を示した。

證人の申し立てによると鐵砲は、例の夜中に兄弟同志の格闘の際被告から取り上げたことになつてゐたが、しかし、其後鐵砲の始末はどうなつたか誰も心當りはなかつた。

『間違はない、女コツクが戸棚の中に隠してしまつたんだ』と労働者の一人が口走つた。

辯護士はそのことに言掛／＼をつけ、あらゆる努力したにも係らず、この事實は適當の根據を以つて確定することは出来なかつた。しかし假令實證こそは上げることは出来ない迄も、若し假りに鐵砲が戸棚の中に實際に置いてあつたものとすれば、ザーハルは如何に努力しても、人に氣付かれない様にそれを持ち出すこと

は出来ない筈であつた、と云ふことは判り切つたことであつた。即ちその戸棚に接近する爲めには、いやでも労働者達が晩食してゐる臺所を通るか、でなければ廊下を通らなければならぬのだが、其處ではその時刻頃小間使の娘が寢床を敷いてをり、それに近くの母親の部屋のドアは開かれて居り、母親は未だ寢てはゐなかつたのである。

非常に時間を費して詳細に審査したことは、ザーハルが徒歩で町に到着し、その足で直ちに引き返し、夜明の時刻までに農舎に戻る事が出来たか、どうかの問題であつた。

『都合七時間で歩き終つたことになる……』と辯護士は數え上げた。同時に聴衆中の多數のものも指を折つて時間を數えた『町までの道程が二十六露里として……往復では五十二露里になる譯である。そこで假りに鐵砲を手に入れて、犠牲者を待ち伏せしてゐた時間を計算に加へないとしても、被告は一時間に八露里と

云ふ速力で休みなしに駆け通したことになるが……この速力と云ふものは、餘り悪くない百姓馬の疾走速力に相等する。だが馬でさえ五十二露里を駆け通すと云ふことは不可能なことであると云はなければならない。』

これは反對者に對する巧妙な駁論であり、従つてそれが一般聽衆のものに與えた反響もいちぢるしいものであり、裁判官連さへ顔を見合せた程であつた。

ザーハル黨のものはすつかり悦に入つた。に引きかへ商人のミロスラフスキイを筆頭に陪審官連中丈けは意氣消沈の態であつた。

氣の毒なことに亦もや、老馭者が切角の雰圍氣を壊してしまつた。

『二十六露里と云ふなあ、少し數へ過ぎまさあ。そいつは廻り途の事で……そのかはり淺瀬を渡つて眞直の道を行けあ十八露里もどうか？……わしやこの足で幾度か歩いてますだ』

檢事はこの事實を捉えて、次の點に陪審官の注意を促した。

即ち、心が悶々の中に紛亂してゐた當時のザーハルは馭者の物語りによつて、自分の戀人が拷問の苦しみに陥つてゐることを知り、極度の神經の興奮状態に陥つたのであり、その爲め或は全道程を走り通したと云ふこともあり得べきことである。馭者の云ふ方向に路を擇べば——亦それに違はないが——いやでも耕地、小沼地、小河の淺瀬を通らねばならないのである。ザーハルがひどく土塗れになり、疲れ切つて歸つて來たのはその邊の事實を裏づけるに足る何よりの證據である。

一際の顛末がそれからそれと明白に眼前に浮ぶ様な氣がして、聽衆中の多くのものは彼が闇の夜に、頭髮を亂し、眼は血走り、怨恨の情に心亂れ、阿修羅の様に野を過ぎ、沼を過ぎて駆け行く、兄殺しの彼の當時の様を眼前に髣髴せしめた。

道程に就ての問題は假令辯護士が、先づその近路に就ては未だ何人も實測したものではないこと、次に假りにこの往復の道距が三十六露里にしてみたところで

この道距を歩くとも考量するならば『兇行のあつたのは十一時である。してみると被告は町まで實に二時間で駆けつけたと倣なさねばならない……』そんな短時間の中に、馬でない人間が休みなしに走るなどと云ふことは到底出来得べきことではない、と云ふことを論じてみてもみたが、結局彼の説は葬られてしまつた。

問題がキリム・イワーノウキツチが死の刹那に叫んだことは何を意味するものであるか？と云ふことに移つたとき、証人達は、彼はザールハルの名を叫んだのであると繰返した。

『御婦人の証人、あなたにお尋ねしますが、あなたも鐵砲の音をお聞きになつたとき、非常に喫驚なすつたんでせうね』辯護士は、殊更に女コックに訊ねた。

『喫驚したところの騒ぎぢやありません。私し目がくらんで……そのとき手に持つてゐた皿を思はずおつこととしてしまひました。』

『ところで、そのときどんなことをあなたは一ばん最初に考へました？』

『ザールハル・イワーノウキツチさんが、キリム・イワーノウキツチさんを殺したんだと、そう思ひました』

『そのとき直ぐにさう思ひになつたのですか？』

『直ぐにですとも、まるで、そうね、わたしに光りものでも来た様に、すぐにそう思ひました』

『それは叫び聲を聞きつけたよりも、もつと早くでしたか？』

『もつと早くでした』

廊下に寝てゐた娘は實際に馬鹿であることが知れてゐたので、彼女からはたゞ、

『大へん喫驚した』と云ふことより以外知ることは出来なかつた。

『どうしてあなたは、キリム・イワーノウキツチが弟の名を叫んだ、とお考へですか？』と辯護士は、當時刻に門の蔭のベンチに、その戀人である軍人と一緒に腰掛け居た娘の一人に訊ねてみた。

『皆がそう云ふから、で私もそう思ふのでございます』

彼等の仲間中でも最年長者であり、賢い一人の労働者に向つて辯護士は次の様な質問を試みた。

『證人はどう思ひますか？ キリーム・イワーノウキツチは武る危険が弟の方から自分に迫つて來つゝあると云ふことを考へてゐたでせうか？ 彼はその危険に對して何等かの防衛手段を構じなかつたでせうか？』

労働者はしばし思案した後と言ふた。

『多分防備をしてゐたことと思ひます。それ以前にはキリーム・イワーノウキツチには何等の危険も迫つてゐなかつたのですが、あの事件、仍ち掴み合ひのあつた以來と云ふもの、私には、くゞり戸は嚴重に締め、夜は必ず臺所に泊ることを命じました。それやあ、當然のことでございます、何故と云ふに、ザーハル・イワーノウキツチと來ては無鐵砲で、暴れ者でしたからね！ その點はあの一家

の遺傳なんです。あの掴合のとき若し彼から私共が鐵砲を取り上げなかつたら、それこそ、一も二もなく彼は、其場で兄を殺したに相違ありません』

次にその男よりも多少年下の労働者は、兇行のある二日以前に、何者とも知れずキリーム・イワーノウキツチに投石した事實を想ひ出した。労働者達はそれが白痴の手業であると思込みをつけてゐたのである。即ち彼は自分を虐待する長兄を恨み、しかも自分にとつては唯一の庇護者である次兄のザーハルが放逐された以後、自分の戀ひ慕つてゐるグラヒラが、長兄の爲めに拷問されるのを見たとき、長兄に對して骨髓に達するまでの怨恨を懷いてゐたと云ふことを彼等は知つてゐた。しかるにもかゝはらず當人のキリーム・イワーノウキツチの考へは全く別なものであつた。ときに彼は顔を曇らし、やけに、素荒に往來に飛び出し、あたり

に人のゐないと知つたとき彼は『ザーハル奴の仕事だ！』と顔を暗くして一人つぶやくのであつた